

大阪商業大学商業史博物館 平成24年度秋季企画
シンポジウム
商都大阪の文化力

開会挨拶

大阪商業大学副学長
片山 隆 男

基調講演 「商都大阪の文化力」

大阪商業大学商業史博物館館長
伊 木 稔

報告 1 「経済人とコレクション」

国民會館会長・ダイワボウホールディングス相談役
武 藤 治 太

報告 2 「文化装置としてのミュージアム」

兵庫県立美術館館長・金沢21世紀美術館特任館長・
大阪市立美術館名誉館長

蓑 豊

報告 3 「アジアにおける大阪とその文化」

関西大学文学部教授
中 谷 伸 生

パネルディスカッション

コーディネーター 大阪商業大学商業史博物館主席学芸員

明 尾 圭 造

(敬称略)

司会 それでは、平成二四年度大阪商業大学商業史博物館秋季企画「商都大阪の文化力」の公開シンポジウムを開始させていただきます。今回は九月一四日から始まっております連続講座、そして、今月の一五日から始まっております展覧会、そして、本日のシンポジウムと、多面的な構成で大阪町人の文化意識を作品と共にご紹介いたしまして検証するという企画でございます。

連続講座からご参加いただいている皆様もたくさんおいでかと思いますが、今回のシンポジウムはこの企画の総括的な意味合いがあります。本日のシンポジウムを通じて、大阪が持つ文化力の可能性というものを皆様と共有できる機会となればと考えております。

【開会挨拶】

司会 それでは講演に先立ちまして、本学の副学長片山隆男よりご挨拶を申し上げます。よろしくお願ひします。

(拍手)

片山 皆様こんにちは。今日は本当に秋晴れといましようか、気持ちのいい天気になりました。いま司会からありましたように先日来研究講座を五回重ねてまいりました。今日は、これほど多くの方々に来ていただいたのシンポジウムということになりました「商都大阪の文化力」。この大学には、今ここに皆さんがいてくださいますこの建物

「蒼天」の東側に古い建物がございします。谷岡記念館といいますが、

一九二八年にこの学園を創設された谷岡登という先生がお作りになった建物ですけれども、いま現在もその当時の姿をそのまま残しております。

いまは商業史博物館が入っており、多くの文書・資料が集積されております。河内木綿もたくさんございします。そういうものを大事にするということも、それはもちろん大切なことなのですが、それをもとにさまざまに発信をするという試みを重ねてまいりました。今日は「商都大阪の文化力」ということで、その道のいわば碩学にお話を伺うという機会を得ました。いつてみれば至福の時というのかも分かりません。

ある方の本を昨日ちょっと見ておりましたら、文化は空気であるという言葉が出てまいりました。いい香りのする空気を今日は吸っていただいて、商都大阪、これはどんなものだろうかということ、大阪に住まいする、あるいは大阪に関心のある方が見えになっているかと思ひますけれども、ひと時をご一緒に楽しみたいというふうに思っております。

長時間にわたりますが、どうぞご清聴を賜りますようお願いを申し上げます。(拍手)

司会 ありがとうございます。

【基調講演「商都大阪の文化力」】

司会 それでは、ただいまより基調講演に移らせていただきます。タイトルは総合テーマと同じく「商都大阪の文化力」です。講師は、本学の教授で商業史博物館の館長でもあります伊木稔でございます。講師のプロフィールにつきましては、皆様のお手元にお配りしておりますパンフレットをどうぞご覧になってください。それではどうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

伊木 私は最初に皮切りとして、基調講演というほどのものではないのですが、私自身も、テーマの「商都大阪の文化力」ということについて私なりに考えていることをお話させていただきたいと思っております。

1. はじめに

このテーマ「商都大阪の文化力」というのは、大阪は商業都市、現在でも日本経済の中心の一つなのですけれども、どうも文化については弱いのではないか、かつてほどではないという問題意識に基づいています。文化庁長官をされました河合隼雄先生が、関西のもととの底力というのは文化のほずだということで、「文化力」ということを提唱されまして、「関西の文化力」ということで経済だけではなくて、もう一度文化の力・パワーを発揮しなければいけないということで、経済界、行政と官民合わせて取組んでいる状況だと思っております。

先ほど、文化は空気であるというお話がありました。私自身は文化論の講義の中でいつも言っていることが二つばかりあります。一つは、亡くなられました国立民族学博物館の館長だった梅棹忠夫先生が、「文化というのは要は腹の足し、筋肉の足しではなくて、心の足しになるもの」とうまく表現されました。心を豊かにするものが文化だという、梅棹先生の説を、学生の前でいつも「まず文化とは」というときに紹介します。

もう一つは、「文化は空気である」ということと関係することですが、この5回の連続講座で、いろいろな先生方のお話を聞いて感じたことは、共通点はまさに「空気」のようなものだったのです。山中浩之先生には江戸時代の商人の文化や絵の話とか学問の話をしていただきました。それから本学の塩田真典先生は文化経済学のヨーロッパのほうにお詳しい方なのですが、ヨーロッパの話もしていただきました。

五人の先生のお話に通ずる点は、文化というのは結局ある集団のメンバーを結ぶ共通の価値観であると。つまり美意識を共通する、「共有する」ということが文化の役割だということを、五人の方が何らかのかたちでおっしゃいまして、文化の役割はこれだなど。つまり、人間の結びつき、心のつながりを取り持つ役割が文化・芸術にあるということを感じました。生活を楽しくする、豊かにするということ人にとっての役割だけではなくて、社会にとっては人と人をつないでいくという役割があるということなのです。

2. 近世の商都大阪

天下の台所

商都大阪ということなのですが、私は近世の大阪に焦点を当ててみたいと思います。近世の大阪というのは皆さんご承知のとおりですのでくどくどと言いませんけれども、象徴的にいえば「天下の台所」といわれて、これはたぶん大阪の都市の位置が流通のセンターとなりやすい交通の要衝だった。当時は水運が中心だったということで、それが商都大阪の立地条件に大きくプラスしたと思います。

各藩の蔵屋敷が置かれたり、あるいは『難波雀』という小さな冊子にも出てくるのですが、米とか昆布とか綿とかいろいろ全国の商品を扱う問屋商人が大阪にたくさんいた。

こうして江戸時代の初めに豪商といいますが、大きな商人が出てくるのですけれども、それとも一つ、井原西鶴が『日本永代蔵』で描写したように、製造・小売業も含めて新しい商人がどんどん台頭してきました。

「難波の津にも、江戸酒づくりはじめて一門栄ゆるも有。又銅山にかかりて俄ぶげんになるも有」ということで、お酒を造って江戸に売ったり、あるいは銅、これは住友のことだと思いますが、お酒は鴻池です。それから「よし野うるし屋して、人のしらぬ埋み金有人もあれば、小早作り出して、舟問屋に名をとるも有。家質の銀借して、富貴なるも有。鉄山の請山して次第分限の人も有」。

こういうふうな、「これらは近代の出来商人」だということ、新

しい商人がどんどん出てきた。

新興商人の台頭

その中でよく言われることは、そういう成功の要素として出てくるのが「才覚、始末、算用」。つまりアイデアで商売を起こして、無駄遣いせずにモノを大切に、しかもきちんと利益を上げるといって、よく言われる「才覚、始末、算用」なのです。これは現代の経営にも通じるものがあるのではないかなと思っています。

才覚というのは、商売とか商品を作り出すアイデアのことですから、これはまさに人間の脳といいますが、人材の能力、つまりヒューマン・パワーですが、それを大事にする。始末というのは、けちというよりはむしろモノを大事に使う、あるいは始めから終わりまで計画的に使う。モノをムダなく計画的に使うということではなかったのか。つまりモノのマネジメントだったのではないか。最後の算用は、ご存じのようにお金の話ですが、収入と費用を計算してきちんと利益を最終的にあげていくということです。

「ヒト・モノ・カネ」のマネジメントというのは、経営学のイロハで習うのですけれども、江戸時代の大阪の商人はそういうことを実際に体験的にやっていて、才覚は大事で、モノを始末して、しかもお金は合理的にもうかるように運用する、算用する、という合理的精神です。

ここで才覚の例として、大阪の商人がいかにか商売を工夫したかを具

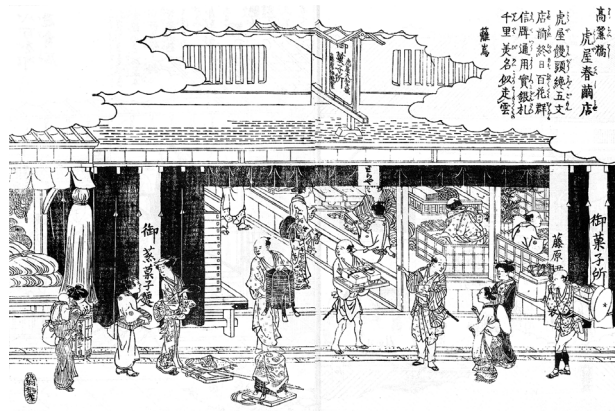


図1 虎屋

体的に見てみたいと思いま
す。

最初は、北浜にありまし
た有名な虎屋です。(図1
「虎屋」)

この店構えを見ても、一
つの典型的な小売のお店だ
と思うのですが、看板が屋
根の軒先に立っています。

それからのれんです。のれ
んが虎屋さんの場合には上
品で大きなのれんが出て
ある。さらに、店先にまん
じゅうの箱とかが積んであ

りますので、たぶん匂いもしたと思うのです。だから通れば、看板と
のれんと並べてあるまんじゅうとまんじゅうの香りで、非常に巧みな
セールス・プロモーション、店頭ディスプレイではなかったかな
と。

虎屋さんは店頭をこつこつに工夫しただけではなくて、もう一
つ有名なのは、「饅頭切手」といっていて、今でいうと商品券です。
商品券というものを虎屋さんは発行していて、まんじゅうの現物を買
わなくても、例えば贈答用に饅頭切手を買って贈れば、それを持って

いったら虎屋さんでまんじゅうと換えてくれるという、今日のギフト
券、あるいは商品券のアイデアをすでに工夫されておられたという
ことです。

次は、畑銀鶏という江戸から来た町医者が、大坂の街のにぎわいに
驚いて書いた『街能噺』という本に出ている例です。図の上にあります
すのは八百屋さんです(図2「街能噺」)。果物が野菜が並べてあつ
て、三つか四つずつ皿に入れて値段が分かるように書いてある。3文
とか2文とか、値段をきちんと表示して、その皿を持っていったら簡
単に買えるということが分かるような店先のディスプレイです。

図の下は米屋さんですが、米を俵や袋ごと置いて売っているのでは
なくて、きちんと桶に分けて、「丹波米」とか「播州米」とか、産地
と値段が書いてあるのです。

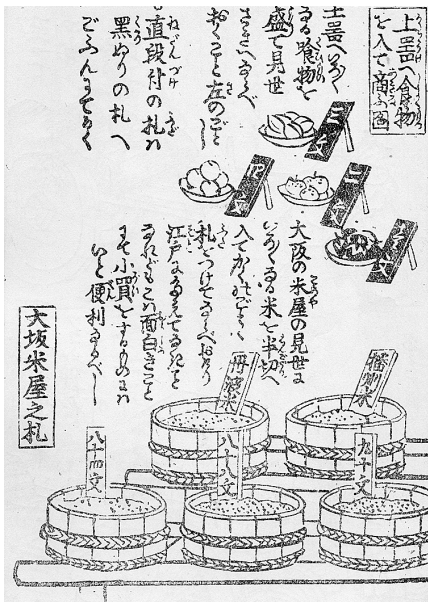


図2 八百屋と米屋

江戸から来た銀鷄さんがびっくりしたの、こうやって、通りがかりの人にも分かりやすく工夫して売っているということですよ。

次の図は幕末になります、『花の下影』というグルメの大坂らしいガイドブックです。ここに出てくる例で、「三八魚店」(図3「三八魚店」というのがあります。ここのお店の魚はどれでも三八文均一ということであって買やすい。まさに今のディスカウントショップ、「100均ショップ」みたいなことをやっていた。



図3 三八魚店

富くじ屋というのはいまの宝くじみたいなものですが、これも当時盛んだったのです。(図4「富の札売」)江戸でも富くじはあったのですが、大坂の富くじ屋は看板からのれんからまず派手です。しかも二等に当たったりしたら、太鼓を担いでドンドン「等大当たり」と言って町中触れ歩くわけです。この派手な演出に、江戸から来た銀鷄

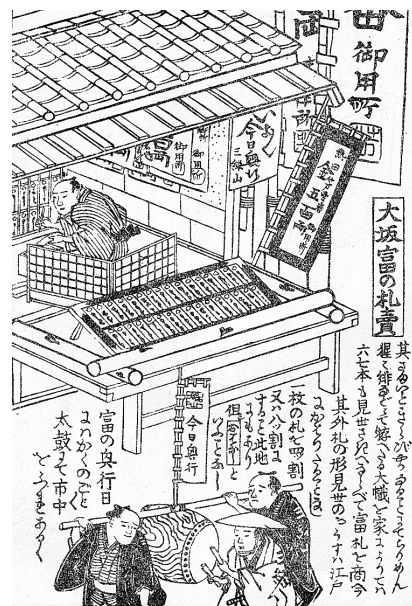


図4 富の札売

さんは驚いています。

次は「摂津名所図会」に描かれた鳥屋さんです。(図5「鳥屋」)鳥を店先に全部出して、実際にさばいたりもしている。その次は鳥屋さんではなくて料理屋さんです。お茶屋さんですが、店の前に客寄せのために、当時非常に珍しいクジャクをおりに入れて飼って、それを見にたくさんの方が来てにぎわった(図6「孔雀茶屋」)。こういう例がたくさんありまして、先ほどの『花の下影』には「クマの茶屋」という茶屋が、本物のクマを店頭で飼って見せていた。

いま述べました江戸時代の大阪の商人の伝統というのは、いまだに道頓堀のあの派手な看板にも続いているのではないかと思います。エビが動いたりカニが動いたり食い倒れの人形があったり、グリコの巨大看板とか、ああいうものは他の町ではあまり見かけない。それは、



図5 鳥屋

江戸時代の大阪商人の、お客さんを引きつける、あるいは喜ばせようとするサービス精神・商法に通じるものがあるのではないかと考えます。

以上みてきたような一店の商売の工夫だけではなく、町全体でにぎわいを演出しようとしていたのが大阪の商人の特色です。例えば夜店です。順慶町という夜店で有名だったところです。(図7「夜店」)当

時、電気はありませんから、植物油やローソクは貴重です。大阪の場合には菜種油を豊富に調達できたということで、その油を使って夜遅くまで夜店でにぎわっていた。

これも江戸から来た人はびっくりするわけです。しかも毎日です。江戸では連日夜遅くまで店が明かりをつけていることはありません。大阪では順慶町だけではなくて何箇所かそういう夜店の場所があったということです。

江戸時代の大阪の商人というのは店頭工夫だとか商品の工夫だと



図6 孔雀茶屋

かサービスの工夫だとか、今でいう消費者志向のマーケティングをたくさん展開していた。さらには、町の夜店だとか、あるいは呉服屋さんが年末になると在庫処分のために、今でいうバーゲンセールのようなことを「誓文払い」と称してにぎやかにやっていたということです。

街のにぎわい

そういう大阪商人の演出

力といいますが、それを象徴的に示しているのが『浪華大紋日高金銭山』^{こがねのやま}という一枚刷りの資料です。これは「くらしの今昔館」の館長をされている谷直樹先生がまとめられた表です(省略)。江戸時代の大阪の町というのは、夜店や「誓文払い」もそうなのですが、年から年中どこかで何かにぎやかな演出、イベントをやっていたという印象を受けます。

一月の十日戎から始まって、今でも続いているものが結構多いと思いますが、天王寺さん、天神祭。桃谷の花見。それから南地の見世物



図7 夜店

小屋。あるいは道頓堀の芝居。それから、年末の誓文払い。各藩の蔵屋敷も蔵屋敷に祭つてある、例えば讃岐の蔵屋敷だと金比羅さんを開帳して見せるとか、商人だけでなく、寺社や武家屋敷までもが、街のにぎわいの仕掛けをしていたといえると思います。

つまり大阪商人というのは、ただ単に問屋、仲買の機能で、全国の物資の流通センターとなったというだけではなく、それ以外に、特に小売商人においては消費者志向のマーケティング活動を活発にやっていたのだということを言いたかったわけです。そういうことは今の大阪人の商売のセンスにもつながっているのではないかと思います。

商売というのは創造、才覚が大事だということ、それを具体的に演出していくプロデュース力です。これは文化とも関係してくる能力になってくると思います。まさに大阪の商人はアイデアの競争を通じて街のにぎわいを作りだしていたのではないかと思います。

3. 大阪商人と文化

芸を嗜む

江戸時代の大阪商人は商売の面で能力を発揮しただけではなくて、芸術・芸能といった文化においても大きな力を発揮した。例えば人形浄瑠璃とか芝居とか、あるいは書画、茶の湯とか、いろいろな諸芸です。

それで元禄文化が花開いたのです。景気も良かったのですけれども、そのあと享保の時代ぐらいになってくると、全体の経済も厳しくなってくる。一方で、淀屋が、諸芸事など派手にお金を使いすぎて闕所になるという事件も起こりました。こうした時代を背景に質素儉約を旨とし、芸事は原則禁止というような家訓とか家憲あるいは家法を制定するようになったのがちょうど享保の頃くらいです。

これがいわゆる商人から商家経営に変わってくる時代。つまり、商人として成り上がって大きくなった商家が家業を代々維持継続していくために、経営の基本として家訓とか家法とかいうものを定めていったのだと思います。

ところが実際には、芸術・芸能が衰えたかというところではなくて、文人画といわれたような絵をたしなむ人とか、あるいはいろいろな芸事、書画、特に学問です、学問も学芸ですからこれも芸のうちです。学問は経営に役に立つという理屈付けもあつたかとは思いますが、文化を大事にする商人の気風というのは享保期以降も決して衰えはしなかったのです。

山中浩之先生も、橋爪節也先生もおっしゃっていますが、商売にとって一番大事なのは「信頼・信用」。この信頼・信用というのは直接人と人との結びつきになるので、そういう腹を割ったというか価値観の共有あるいは美意識の共有のできる関係が信頼の根底にある。それを可能にするのが芸術・芸能であるということで、芸術・芸能あるいは学芸を通じたつきあいを商人は大事にしていたということになってくるかと思えます。

徳の経営

大阪商人は商売でもつけるだけではなくて、もつけたお金を「富の善用」といまして、学問・芸術だけではなく、いろいろな社会貢献もしています。例えば、捨て子を養育する福祉活動。貧しい人は子供を育てられないので大店の前に子供を捨てるということが多かつたらしいです。

また飢饉のとき、貧しい人は食べるお米がなくなるわけです。そのときに大商人は保有していたお米を供出する。幕府もやることはやっただけですが、とても間に合わないので町人に協力を要請をして、大商人は率先して、救援米を供出したという記録がたくさん残っています。

商売というのは信頼と「おかげさま」という意識が強かったので、世間のために貢献する。近江商人の「三方よし」は有名ですけど、大阪の商人もそういう気風を持っていました。まずはお寺とか神社に寄進する。「一建立」といったかたちで寄進したり、あるいは祭

りといった行事に寄付をする。天神祭・祇園祭なんかもそうですが、祭礼に商人が寄進するというかたちです。他にも商人の社会貢献として有名なのは大阪の橋や堀ですけれども、そういった町の公共的なインフラの整備に力を尽くしたのが大阪商人だったと思います。

学問を通じた社会貢献

最後に、強調したいことは、大阪の商人は商売をしながら、一方で学問をしたということです。幕府が作った学校や大名が作った藩校といわれるものは大阪にありません。読み書きそろばんの寺子屋はありましたが、もつちよつと高等な学問は、儒学の私塾というものが若干あることはあつたのですが、体系的・組織的に学問するということとはなかつたのです。それで大阪商人が自ら先生を招いて作つていったのが大阪の学校です。

その第一の例が、平野にありました「含翠堂」です。当時平野は郊外になるのですけれども、大きな商人がたくさんいたところ。この商人たちが京都や大阪から、儒学の先生を呼んできて一七一七年に勉強を始めたのがこの含翠堂です。

平野ではすでに元禄期から七名家をはじめとして、上層町人がサロンの勉強する学習会はあつたのですけれども、学校というかたちに整えたのが、土橋家をはじめとする七名家です。

それまでの私塾というのは、だいたい一人の先生が個人で塾を開き自分が謝礼をもらってそれで生活するというのがほとんどなのです

が、含翠堂では、継続的にやるために「同志」といつていますが、同志を集めてお金をみんなで出し合って基金のようなものを作って、商人らしい工夫で運営をしていく。教えを受ける先生には謝礼を払って専門の学者を呼んできたということです。

平野の含翠堂は商人たちが勉強しただけではなくて、社会のための学問ということを実践的に進めた点に特色があります。一例として、

「賑窮料」^{シキキョウリョウ}が挙げられます。

事業の内容は、貧民救済のために基金や急激な物価変動に備えて平時から有志が資金を拠出して積み立てておくものです。実際に平野では、享保の大飢饉のときに、賑窮料から供出して平野郷の多くの貧民を餓死から救った。その後も何回かそういうことがありました。

次の「懷徳堂」は船場のだ真ん中、いまの日本生命の本社があるところにあつたわけです。含翠堂とは関係が深く、商人同士あるいは先生との交流がありました。新聞にも出ましたけれども、先日、懷徳堂の最初の学主である三宅石庵先生の手紙が出てきました。三宅石庵は大阪で塾をやっていたのですけれども、大きな火事がありましておうちが焼けて、そのときに避難したのが前々から知っていた平野含翠堂です。実は含翠堂に避難していた、という手紙が出てきました。

三宅石庵が大阪で「多松堂」という塾をやっていて、いったん平野に避難して、また、大阪の商人たちがげびとということと呼んで、船場でも学校をやりましたよ、作りますよといってきたのが懷徳堂です。「五同志」という大阪の五人の有力な商人が中心になって作った

のです。中でも道明寺屋という醤油屋さんが中心になって、自分の隠居部屋も学校の建物として提供した。

含翠堂で始めていた経営のノウハウ、いわゆる西鶴の「才覚、始末、算用」という経営のノウハウをこの学校の運営に適用したところ私が私はずいと思つています。懷徳堂は、学校の組織面では教育部門と経営管理部門に分けた。教育部門は三宅先生の学主を筆頭に、先生方は研究教育のほうに専念してください。学校の経営管理は商人に任せてくださいということと学校の運営を確立した。

これはいまの財団法人でいうと基本財産といいますが、そういうものを拠出して、基本財産は取り崩さないでその運用で年々の経費を賄っていく。足りなかつたら寄付で追加していくというようなことで運用した。つまり、学校の経営と先生の研究教育というものをきちんと分けたというのは、大阪の商人が作った学校らしい特徴だったと思います。しかも学問の内容は非常にレベルが高くて、三宅石庵以後、大変有名な学者が出ています。道明寺屋さんの息子で富永仲基という人や、山片蟠桃という、番頭をしながら『夢の代』という百科事典みたいな本を書いた人が有名です。

他にも中井鶯庵、中井竹山など優秀な学者が歴代続きまして、含翠堂もそうなのですが、なんと二百年以上も続くわけです。幕末・明治維新のときまでどちらも続くわけです。それはやはり学校経営のノウハウが確立していて、困難なときもあつたと思うのですが、そのときには基金を運用したりお金を集めたりして経済的に何とか支えています。

たという、そういうノウハウが非常に素晴らしかったのではないかなと思います。

幕末に近くなって「適塾」という塾も人材を輩出しますが、この適塾も緒方洪庵という先生を中心に船場の商人たちがそれを支えたということ。商人が自ら勉強して学問の恩恵を受けながら学問を支えていったというのが、成果を挙げた一つの大きな理由ではなかったかなと考えています。

そのほか木村兼葭堂のサロンとか、大阪では知的ネットワークが盛んで、いろいろな学問・文芸などのサロンというものがあって、商人たちは商売をきちんとした上で、やはり「信頼のネットワーク」を作るためにサロンを通じて交流を深めていったということになると思います。

江戸時代を通じて大阪の商人は商売の面でいかに長けていたかということは前半で述べましたけれども、それだけではなくて芸術・文化、特に学問の分野で自分たちが学問を実際にしながら学校の経営を支える、商人らしい知恵で支えていったところが大阪商人の重要な特徴です。

今日、CSRとか、企業の社会的責任とかいわれていますけれども、CSRやらフィランソपीという外国流の考え方ではなくて、すでに江戸時代の大阪商人は、社会貢献を自らの必要に迫られて、商売をきちんとやっていたためには知的ネットワーク、それから信頼のネットワークが要るのだということを察知して、社会のために大きく

貢献していたのではないかと思います。

まさにそれが江戸時代の大阪商人の文化力ではなかったかなと思います。どうも長時間ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 伊木館長、ありがとうございました。

【報告1「経済人とコレクション」】

司会 それでは引き続きパネリストの先生方のご報告に移ります。鐘紡の中興の祖といわれた武藤山治は、経済界にとどまらずコレクターとしても大変有名な方でした。これから講演いただく國民會館会長およびダイボウホールディングス相談役の武藤治太先生は、そのお孫さんに当たられます。武藤先生ご自身も絵画などのコレクターとして大変有名な方です。ご報告のタイトルは「経済人とコレクション」です。それでは武藤先生、どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

武藤 ご紹介いただきました武藤でございます。今日は講師に来ておられる先生方はそれぞれの道の専門家の方々ばかりでございます。私は本当に学者でも何でも無い、一実業家の端くれでございます。今、ご紹介がございましたように、コレクターの立場として何でもいから話してくれということなので、恥を忍んでここへまいったわけでございます。しかも皆さん方、非常に資料なども用意しておられますし、パワーポイントなども用意されておるわけでございます。

私もパワーポイントと思ったのですけれども、与えられた時間は20分か25分でございます。私は自分の欠点を言いますと、パワーポイントで話し出すと次から次へと話しをしまして止まらないのです。そういうことでございますので、あえて今日は何も資料なしでお話をさせていただきます。その点、お許しいただきたいと思えます。

先ほどお話がございましたように、私は二〇年ほど前から大阪を中心とした日本近代絵画を集めております。具体的には、皆さんご承知かと思えますけれども、小出権重、あるいは林重義、金山平三、野口弥太郎といった方々の作品を少しだけ集めている次第でございます。先般、「阪神間に住んだ画家たち」ということで講演を頼まれました、この方々のお話もさせていただきます。

私が住んでおりましたところは神戸市東灘区住吉山手というところでございます、かつてそこには、もともとの旧名は観音林というところでございます。この観音林というところはいわゆる大正から昭和の初めにかけての阪神間モダニズムの中心地であったところでございます。昭和一一年の阪神大水害で大きな被害を受けまして、それからかなり様子は変わったわけでございますけれども、かつて観音林倶楽部というものがございまして、それを中心にして栄えたところでございます。

その中に当然、芸術家の方もたくさんいらっしゃいまして、私の隣は野口弥太郎さんという画家の家でございます。また、五分ほど南に行ったところにありましたのが林重義さんのお宅でございます。林重

義さんは昭和一九年に亡くなっておりましたので私の子供の頃はもうすでにおられないかったのですけれども、私が子供の頃はまだそのアトリエが残っておりましたので、その家にまいいりまして、そのアトリエに入ったこともございます。それやこれやで、いま申しあげましたような作家の作品を多少集めている次第でございます。

そもそも私が美術品に大変興味を持ちましたのは、さっきのお話にございましたように、私の祖父、武藤山治と申しますけれども、この武藤山治の影響と、それから私の父親自体もギリシャ美術史の学者でございました。その影響を受けたのではないかと思えます。しかし、祖父のように大きな財力はございませんので、細々と少しだけ集めているという状況でございます。

いま、祖父、武藤山治の話が出てきたわけでございますけれども、武藤山治は昭和九年に亡くなっておりますので、現時点ではほとんど知られていないのではないかと思えます。しかし、鐘紡という会社のことについてはおぼろげながらご存じの方が多いのではないかと思えます。鐘紡はついこの四、五年前に倒産いたしました、現在この世の中には鐘紡という会社は存在しないわけでございます。この鐘紡の事実上の創始者が私の祖父、武藤山治でございます。

武藤の略歴を簡単に申し上げておきますと、一八六七年、慶応三年、岐阜県の生まれでございます。慶応三年の翌年、慶応四年が明治元年でございますので、明治と共に歩んだのが武藤山治の生涯でございます。幼い時から大変な秀才でございますまして、地元の小学校を終え

た後、父親に連れられました。父親が当時有名であった福沢諭吉の崇拜者であつたわけですが、自分の息子はぜひ福沢諭吉の作つた慶應義塾へ入れようという決心をいたしました。幼い息子を伴ひまして上京いたします。そうして福沢先生の慶應義塾に一二歳のときに入塾いたします。その後六年間、福沢諭吉から直接教わりまして、一八歳で卒業後、学友二人と共にアメリカへ渡ります。

アメリカへ遊学というような悠長なものではございませんで、苦学でございます。当時向かいましたのがサンフランシスコ。当時、アメリカのカルフォルニア州には日本人は百名程度しかいなかったそうです。その中にありまして、今でこそIT関係で非常に有名な都市になつておりますけれども、サンノゼというところがございます。このサンノゼにございましたパシフィック大学という大学のスクールボーイに入りました。スクールボーイというのは給仕でございます。アメリカの大学は全部全寮制でございますので、朝、生徒の方々が朝食をする。その用意、後片付けをした後、授業に出て勉強をする。こういうスクールボーイの生活を二年間続けまして帰国いたします。

話をするとだんだん長くなるのですけれども、現在もパシフィック大学と私も武藤家との間の関係は続いておりまして、実はこの二四日にパシフィック大学の図書館の日本祭りという行事がございます。私はそれに招かれることになっております。それはそれといたしまして、パシフィック大学に苦学した後、日本に戻りまして東京の銀座で日本で最初の広告代理店を始めます。この広告代理店は大変成功

したのですけれども、この広告代理店を他人に譲つた後、横浜で政治新聞の記者でありますとか、あるいはこの会社は今でもございますけれども、ドイツ系の商社でありますイリス商会という会社に入りました。

当時国策でございました鉄道施設のためのレールの輸入販売をドイツからやりまして、それに従事するというようないろいろな仕事を経験した後、明治二六年（一八九三）に、当時三井銀行、トップ銀行でございましたけれども、その三井銀行の総帥でございました中上川彦次郎の知遇を得まして三井銀行に同行いたします。三井銀行におりましたのはわずか一年でございまして、その翌年に中上川の命を受けまして、当時三井銀行の子会社でございました鐘紡に入ります。

当時の鐘紡は非常にボロ会社でございまして、倒産寸前というような状況にあつたわけでございますけれども、中上川はやはり、武藤は見どころがあると思つたのでしよう。弱冠二七歳の彼を、神戸の兵庫工場を新設する責任者に任命いたします。それ以来、約四〇年間、いろいろ辛酸をなめ尽くしたと思ひますけれども、鐘紡の経営にあたりまして、鐘紡を戦前の日本一の売上、そして利益ナンバーワンの会社に育てあげたというのが、彼のまず第一の功績であります。

その後、彼は衆議院議員となります。やはり社会の矛盾というようなことにいろいろ感じるところがあつたと思つたのですけれども、それを何とか是正しなければいけないということで衆議院に出ていきます。しかし衆議院に出ていきますけれども、その中では彼の理想の実

現というのはなかなかできなかったわけです。そこで彼は政界を引退した後、大手前に政治教育のための國民會館というものを作りしました。

「さあ、これから國民の政治教育を大いにやろう」としていた矢先に、昭和七年（一九三二）なのですけれども、恩師の福沢諭吉が作りました、今はごさいませんけれども、時事新報という日本一の新聞社がございました。これはいろいろな原因はあったのですけれども、放漫経営で本当に崩壊の危機にひんしていた。慶應義塾のいろいろな先輩が「これではいかん」ということで何とかこれを立て直せということ、白羽の矢が立ったのが、当時鐘紡を辞め、政界を引退したばかりの武藤であったわけでごさいます。

武藤は何十年間にわたっていろいろな活動をした後だから、少しゆっくりしたいなというふうに思っていたのですけれども、恩師福沢の作った新聞社が経営危機にひんし、これはやはり自分が乗り出さざるを得ないということでそれを引き受けます。引き受けて二年間でだいたい再建のめどをつけるわけでごさいます。

昭和八年の暮れごろから時事新報上に連載してありました「番町会を暴く」という記事に関連していると思われるのですけれども、それが本当に原因だったかどうかは昭和史の一つの謎といわれておりますが、それに関連いたしまして、昭和九年の三月九日、自宅から当時の北鎌倉駅に出勤する途上、暴漢の狙撃を受けまして、翌日の三月十日に亡くなったのが彼の劇的な一生のあらましでごさいます。

一方、彼は非常に文化面におきまして優れた人でした。もともと彼は文学者志望だったのです。ところがいろいろ運命の変転で実業家になったのですけれども、そういうことで、そういう感性にも非常に優れた人でありました。古美術品の収集ということを非常にやっただけでごさいます。特に与謝野蕪村の収集家でごさいました。収集家であると同時に研究者でもありました。

明治から大正にかけて蕪村の評価というのは、俳句においては松尾芭蕉に劣る。一方絵画においては池大雅に劣るといふ具合に言われておりました。山治は反骨でごさいますので、そんなことはないだろうと。俳句についてはなるほど芭蕉側のほうが上かもしれないけれども、絵画では決して大雅に劣るものではないという信念を持ちまして、蕪村の絵画を積極的に収集いたしました。

また単に収集するということではなくてその研究に努めまして、大正の終わりに自ら『蕪村画集』という蕪村の研究書を上梓いたしました。これが日本における最初の蕪村の研究書でごさいます。皆さん、ご覧になったらお分かりになるかもしれないですけれども、新しく蕪村の画集でありますとか研究書が出ますと、その一番最後に参考文献として、必ず「一番最初に」武藤山治『蕪村画集』と必ず出てきます。そういうような実績のあった人でございまして。

彼の蕪村収集の最後にたどりついたのは、皆さん、教科書にも出ておりますのでご存じの方もいらっしゃると思えますけれども、先年国宝に指定されました「夜色楼台雪万家」という絵でごさいます。

一方、蕪村だけではなくて、光悦、宗達、光琳、乾山といった琳派のほうにもずいぶん興味を持ちまして、いろいろ収集を行ないました。尾形乾山の陶器がいま非常にもてはやされておりまして、一級品として非常にもてはやされております。野々村仁清、尾形乾山ということになっておりますけれども、明治の終わりから大正の初めころは、乾山の焼き物などはあまり見向きもされなかったのです。これを世に出したのは武藤山治の功績でございます。

大阪市立美術館、ここに前館長で名誉館長でいらつしやいます蓑先生もいらつしやいますけれども、この大阪市立美術館は二つの大きな絵画のコレクションからなっております。その一つは東洋紡の元社長でございました阿部房次郎さんがお集めになりました、中国の唐・宋・元・明の絵画のコレクション。もう一つが、武藤山治が買っていますいろいろな事情があつてその辺は触れると長くなるのですけれども、私の父親が大阪市立美術館に寄付させていただきまして、尾形光琳に係する小西家文書というもの。この二つが大阪市立美術館の根幹をなしているわけでございます。

小西家文書というのは、光琳は非常に浪費家でございますのでいつもお金に困つていたのですけれども、それではいけないなということとで、自分の長男を小西という非常にお金持ちの家の養子にしたのです。その家に伝わったものが明治から昭和の初めまで残つておりまして、この有名な小西家文書を私の祖父が買い取つた。これを寄付させていただいたという経過がございます。

その他、いまNHKで「清盛」をやっておりますけれども、その清盛にも出てきますけれども、「平家納経」というものがよく出てきます。これは平安時代の装飾経の一番優れたものなのです。それに匹敵する「久能寺経」というお経がございます。これは鳥羽天皇一門が作ったものでございまして、日本で最古の装飾経と言われております。この久能寺経を始めとする仏教美術というものの収集にも武藤は力を尽くしました。

一方、武藤は若い有望な画家、洋画家の人たちへの援助を惜しまなかつたわけでございます。皆さん、よくご存じかもしれませんが、この民家の絵をよく描いておられる方で向井潤吉という方がおられます。それから関西の作家で、向井潤吉ほどは有名ではありませんけれども、伊藤慶之助という作家がおられます。二人とも物故でございまして、この二人を援助いたしまして、パリまで留学させたというようなことも行なつております。

武藤のコレクターとしての態度といえますか、基本的な態度・考え方というものを一言だけ触れさせていただきますと、とにかくものを買うには学者等の意見は一切聞かない。全部自分の考えに基づいて買う。こういうことが彼のやり方です。昔の実業家の人は非常に金銭的にも余裕があつたのかもしれませんが、とにかく人の意見などはどうでもいい。自分がよいと思つたら買うと、悪いと思つたら買わないという基本的な考え方であります。

一つのエピソードがあるのですが、彼は奈良へ古美術品を買

い出しに行くわけです。そうすると、武藤さんが来るということ、奈良の業者がみな待ち構えているわけです。それでピンからキリまで全て持ち込むわけです。そうすると、武藤のほうは、それは一応、見るのだと思いますけれども、持ち込まれたものは特に悪くない限りはほとんど全部買った。貨車いっぱい買って帰ったというようなことも聞いております。

これは一つのまき餌なのです。悪いものを買っても、あの人はあれを買ってくれたから次にいいものが出たときにはこれを持っていつてあげようかというような戦術なのです。そこに武藤の一つの買い方の特色があったのではないかと思います。

ここに、國民會館のことを先ほどもちよつと触れましたけれども、國民會館は昭和八年に出来上がっていたのです。武藤はその後、政治活動をやめて國民會館を創設しました後、その活動をやるうとしていたのですけれども、時事新報の経営にタッチせざるを得ないということとでございました。國民會館には、開館式の一に行ったきりなのです。その後、彼の死後、昭和九年の十月から「武藤記念講座」というものを開催いたしております、これは毎月必ずやっております。現在九六五回を数えております。

講師の先生も、戦前から戦後にかけては湯川秀樹博士でございますとか、松下幸之助さんでありますとか、非常に一流の講師に来ていただいてもらっております。この中の方もご興味のある方は誰でも会員になれますから、ぜひ、ご来場賜ればありがたいなと思っております。

す。

先ほども触れた中に入っているのですけれども、戦前の実業家は収入が現在とは比較にできないほど多かったというようなことがあったと思うのですけれども、皆さん、仕事の他に多彩な趣味をお持ちになっていました。美術品の収集もそうですし、お茶に力を注ぐとか謡曲に凝るとかいろいろな趣味を持っておられました。特に美術品の収集を心がけられた方は多数おられます。

関西でも例えば白鶴美術館の嘉納家でございますとか、あるいは朝日新聞、いま香雪美術館という名前になっておりますけれども、その村山家でございますとか、同じく朝日新聞の上野家でございますとか、あるいは藤田美術館の藤田家。ちよつと毛色は違いますが、西洋美術、近代絵画をお集めになった大原孫三郎さん。大原孫三郎さんは武藤と同業でございましてクラボウの創設者でございます。それから住友家は中国の青銅器をお集めになりました。京都に泉屋博古館というものがございます。それから先ほど出ました、中国絵画の阿部家。あるいは、これは時代はだいぶ後になりますけれども、有名な佐伯祐三のパトロンでありました山本發次郎さんとかです。

こういうような、非常に枚挙のいとまがないほど、いろいろな趣味人が大阪にはおられたわけでございます。それに引き換え現在の経営者というのは、サラリーマン経営者の時代でございます。そうしますとやはり残念ながらお金もない、勉強もしていないから趣味もない。残念ながら美術品を積極的に収集する方はほとんどいないというのが

現状でございます。

先ほども先生方とお話していただきましたけれども、現在の経営者の趣味は「こまかし」だなど。「じ」は「ゴルフ」、「ま」は麻雀、「か」はカラオケ、「し」は新地と「ついつい」とらうしいです。(笑)

せつかくこういう、先ほどのご講演もございましたように、大阪というのは非常に文化の風土のあるところでありますから、やはりそういう趣味を持ったほうがいいのではないかと思います。

私もときどき、いろいろ会社を訪問したりして見に行ったりするのですけれども、応接間に立派な絵がかかっていますでしょう。小磯良平がかかっていたり、金山平三がかかっていたりします。私はお会いしたその方と「お宅の金山平三はいいですね」「立派ですね」というふうに話を向けるのですけれども、それに乗ってこられた方はほとんどいません。残念ながら。

非常に残念だと思ってしまう。かくいう私も、古美術を購入する資力はございませんので、残念ながら日本近代絵画で我慢しているという状況でございます。とりとめのない話を聞いていただきましてありがとうございます。(拍手)

司会 武藤先生、どうもありがとうございます。余談でございますけれども、武藤治太先生が連載されておられます『大阪春秋』や、次にお話いただきます養豊先生の『超(集客力)革命』という角川書店の新書判の本を、休憩時間等で受付のところでお分けできますので、どうぞご利用ください。

【報告2「文化装置としてのミュージアム」】

司会 それでは次に養豊先生にお話させていただきます。養先生はご存じのように、兵庫県立美術館の館長及び金沢21世紀美術館の特任館長、そして大阪市立美術館の名誉館長をされておられます。養先生はカナダやアメリカの美術館の学芸部門で長らく活躍されまして、斬新なノウハウで国内外の美術館運営に携わってこられました。

本日のご報告は「文化装置としてのミュージアム」です。それでは養先生、どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

養 どうも皆様こんにちは。養でございます。非常にうんちくのあるいろいろなお話を伺いました。私は、美術館という装置が文化に貢献し、これからの若い子供たち、将来日本を背負って立つ人たちが素晴らしい感性を持って、また新しい創造を生んでくれることを願いながら頑張っている次第でございますが、美術館に来ることの素晴らしさと、どれだけのことが美術館から発信できるかというお話をしたいと思っております。

私は金沢に四年半いました。新しい美術館の立ち上げから携わったのは本当に初めての仕事です。新しい美術館を最初から作るという夢がありましたので、ちょうど大阪市立美術館の館長もしていましたけれども、兼務をしながら金沢21世紀美術館開館という難しい仕事を引き受けました。

現代美術という何か皆さんは「震えが出てくる」とか、「何も分

「からない」がらくたばかり集めてこれに何のいいところがあるのだ」という印象でしょうが、私自身も実際は何も分かりませんでした。私の専門は中国陶器なのですけれども、中国陶器を見ていて美しい、素晴らしいなという感覚が分かれば、あらゆる美術でも分かる、分からなければうそだという信念を持っていましたので、飛び込んでいきました。

現代美術を大人の方に教えても、なかなか理解してもらえません。やはり子供るときからこういうものに親しむ、それしかない。そこで何とかして子供たちに現在美術の楽しさを教えようということで始めました。実際に金沢には毎年一五〇万人ずつと来ておりますし、これからこの一五〇万人はずっと続くと思っています。それだけ子供たちに浸透していますから、これがどれだけの力があるか、もう皆さんもおわかりいただけるかと思っています。

NHKの「ニュース9」というものがありますけれども、急に電話がありまして「蓑さんがフェルメールのブームを作るきっかけをしたということを知っているのです、ぜひ一度ニュースで話してくれ」という依頼をうけ、話をさせてもらいました。

それはちょうど二〇〇〇年ですから二年前のことです。何とかしてこの素晴らしいフェルメールの絵を子供たちに見せたいということ、今はそう難しくありませんけれども、大阪は組合が強いときでしたので組合交渉で責められましたけれども、無理をして四回ほど通常は閉館している月曜日に開館し、子供たちを招待しました。

そのときの子供たちが二年後のいま、フェルメールの感動を自分の子供にも見せたいと。子供たちに二年前教えたことがいまずっと花を咲かせているのではないかなと思います。これからもその子供たちがまた自分の子供ができたときに花を咲かすのではないかと期待しています。そういう話をしました。

大変すごい反響があり、いろいろなところからお手紙をもらったりしています。ちょっとしたことなのだけでも、実際にやってみて大事だなと思います。

兵庫県立美術館でいま文化セミナーというものをやっています。そこで須磨久善先生という、皆さんも聞いたことがあると思いますけれども、心臓バイパスの手術で有名で、この間天皇陛下を手術した天野篤先生の先生といいますが、五千件以上手術をしている大変優れた先生が尊敬している人に来ていただきました。

たまたま東京と一緒に須磨先生と食事をする機会がありました。そのときに先生が、自分は小学生に心臓の手術を見せているよ、と。もう今は三千人以上の子供たちがその手術を見た。すごく反対する両親はたくさんいるけれども、見せるということは大変大事なことだし、将来この子供たちがお医者さんになりたいという気持ちになると思うので自分はやっていて、もう十年以上になる、と。

そうすると、あるとき、先生のところへ新しい先生が訪ねて来た。「実は私は小学生の時に先生の手術を見学させてもらいました。どうしても医者になりたくて、実際に医者になりました」という報告を受

けてすごく感動したと。

その話を聞いて、「これはぜひ兵庫県立美術館に来て、先生、そういう話をしてください」ということで、数月前にお話してもらいました。大変素晴らしいレクチャーで五百人近くの人に来ていただきました。私の考えていることが、先生と同じようなことになっているので大変喜んでいきます。

もう一つ大事なものは、もう亡くなりましたけれども、大変有名な経済学者でガルブレイスというハーバード大学の先生が日本へ来たときに、「もう日本はこれだけ経済成長をして経済も豊かになっているのだから、そろそろ楽しみなさい」ということをおっしゃって帰られた。その言葉がすごく私の胸に残っています、やはりお金だけをもうけることを毎日考えるのではなくて、その時間を楽しむことも大事だよということを教わった。

それにはやはり美術館へ来たり、いい音楽を聞いたたり、そういうことがいずれました、素晴らしい創造を生んでいくことになると思うので、いつもガルブレイスの言葉を信じて仕事をしています。

もう一つ、最近も、安藤忠雄さんが台湾の人を二五〇名ぐらい美術館に連れて来てくれたのです。そのときに彼がレクチャーをしまして、やはり美術館に来ること、音楽を聞くというのは一つの栄養剤だという言葉をおっしゃったのです。美術館に来ることによって今までにない栄養を吸収して、またそれがいい感性で、また新しい創造を生む。すごく大事なことだと思っています。

それでは時間も限られていますので、パワーポイントを使ってお話をさせていただきます。

皆さん、美術館というと、いわゆるギリシア建築のああいう神殿を思い出すでしょう、階段を上って恭しく入っていく。もうその時代は終わったと思うのです。一九五九年にフランク・ロイド・ライトが初めてニューヨークに飛び込んで、古い有名な高級住宅地の中にこういう近代的な建物(図8)を作った。これは、建築で人が呼べるという、一つの装置を作ったと思うのです。

けれども一九五九年ですから、しかもニューヨークのご真ん中、道路を渡れば有名なセントラルパークという中にこういうわけの分からない、今までにない建物が突如現れた。大変反対も多かったのですが、建つのにアメリカでは約二十年かかっています。「近代建築というのはこんなに面白い」と。もちろん美術館の内容も大事ですけども、それで人が集まるといって一つのきっかけを作ったのがこのライトの一九五九年です。

それ以降、また二十年かかるのですけれども、一九七七年に、今度はレンゾ・ピアノの建築でパリにポンピドゥーセンター(図9)が、突如また工場みたいな建物が、しかも住宅街に現れるわけですけれども、これも同じような問題が起きます。それからまた二十年後、一九七七年にビルバオという、スペインの大西洋側にある造船のまちですけれども、そこも突如、フランク・ゲーリーという大変有名な建築家が街の中心に美術館を作ります(図10)。これができて大変な人気が

起きます。この美術館を訪ねるのに毎年一〇〇万人、今でも続いているのですけれども、美術館というものがこれだけの人を集め、しかも経済効果も高いというすごいものを皆さんが発見していくのです。

そして一九九七年にはJ・ポール・ゲティ美術館をリチャード・マイヤールという有名な建築家を作ります。この一九九七年以降、三年後テイト・モダンができますし、金沢の21世紀美術館(図11)が二〇〇四年に、それからMOMA新館も同じときにできるのです。

だからもういまは、近代建築は人を呼べる。また経済波及効果がどれだけあるか。金沢でいうと、毎年一五〇から二〇〇億円のお金が、この金沢21世紀美術館を訪れる人々のおかげで、交通もそうですし、ホテルもそうですし、食べる、飲む、あらゆることでまちにお金が落ちていくわけですから、それだけ経済効果があるということが各美術館をここで見ても分かると思います。

これは金沢21世紀美術館です。なぜこれだけの人が金沢に来てくれるのか。

アメリカでは、美術館に訪れるのは約六〇%が家族連れなのです。けれども日本の場合、皆さんが美術館に行つて分かるように、家族連れで来ているのは非常にまれです。金沢に来ると一転、変わります。他の美術館ですと子供連れというのはめつたにない光景だと思えますけれども、それをぜひ私は金沢でやりたかったのです。

金沢にある小中学校は九〇校以上で、約四万人の生徒がいます。三カ月間でその生徒を全員連れてくるプログラムをオープンして一カ月

後に行いました。約五千万円のお金がかかりましたし、その予算を取るのに大変でしたけれども、実際それがすごい投資になった。五千万円の投資が、今のこの隆盛の金沢になっていると私は信じていますし、これからも続きます。

それと私自身発見したのは、小学校低学年ですと皆さんご存じのとおり、集中力が十分ぐらいで終わるのです。それが高学年になると、一斉にすぐ興味も示します。やはり、小学校四年生が一番大事な時期だなと私は思つたのです。十歳というのは非常に好奇心もあるし、あらゆることに興味がある。語学もそうですが、もしお金があるならば四年生のときにぜひ子供を連れていろいろなところへ旅をして欲しいのです。それがいかに子供にとつてすごいことか。将来必ず私にお礼を言うことになると思います。

学校の先生は皆さん、知つているのです。四年生が一番楽なので。私も私が見ていても四年生が一番楽だとわかります。もし本当にクリエイティブな素晴らしい先生が四年生の担任を務めたら、日本は必ず変わると思つたのです。けれども今のシステムですと大学出たてで教員免許をもらつて、初めて先生をやる人が四年生の担任なのです。一番指導が楽だからです。私はこれが日本の教育を本当にためにしている根源だと思つています。いま文科省に行くとき必ずその話を、変えてもらいたいと思つています。これでいずれ、何年後かには素晴らしい先生を四年生の担任にすると思つています。

だいたい日本の美術館がだめになつていくのは、どれも郊外に作つ



図8 グッゲンハイム美術館



図9 ポンピドーセンター



図10 ビルバオ・グッゲンハイム美術館

ていったことです。それを金沢ではあえて一番土地の高いと真ん中に作ったことが成功している一つの例だと思えます。これは一番最初に案が出たとき、経済効果は一一億円となっていましたけれども、実際は三二八億円だったのです。一番最初の年ですから、建物の建築がありますから、それで経済効果が大きかったのですけれども、以降は一〇〇億円から二〇〇億円は入っていると思います。

そして、最近金沢で出たデータでは、兼六園と金沢21世紀美術館が、本当に競っているぐらいです。兼六園は四百年以上の歴史がありますけれども、十年もまだ経っていない美術館がこれだけの人を集め

ている。

では、兵庫県立美術館（図12）に来て一体私が何をしているのか。金沢の場合は真新しい、近代建築の素晴らしい歴史に残る建物を作ってもらった。兵庫県立美術館は、二〇〇二年に安藤忠雄という大変有名な建築家が建てた有名な建築なのですけれども、いかにして百万の人がこの美術館を訪れるか。これが毎日苦労しているところですから、何をしたらか。

海に面した部分も全部安藤さんの設計なのです。手前に円形劇場がございますし、ここにバスケットボールの練習場を作っているので

す。30n3の、ニューヨークでいうと街のど真ん中の公園にバスケットゴールがあるような。しかし、この二つが何も使われていない。ここに何とかして人を呼びたいということで、音楽会をやったり、毎年アシックスさんのスポンサーで約五百名がバスケットボールのトーナメントをやるようになっていきます。海から船で来ると素晴らしい景色が見られると思います。

私がしたかったことのもう一つは、この美術館は、一九七〇年に兵庫県立近代美術館として出発したのですが、阪神淡路大震災で相当なダメージを受け、現在の場所に二〇〇二年に安藤さんが作り直した。以前の美術館は原田の森のギャラリイとしてリニューアルしているのですが、そこからまっすぐ下りてくると県立美術館に到達するので、その道を「ミュージアムロード」(図13)という名前に変えさせてもらいました。

電柱も全部取ってもらいまして、それから対岸の倉庫群の壁を全部この色に統一をさせてもらいました。これは安藤さんのポケットマネーで出してもらいました。ちょうどまっすぐ下りてくると美術館なのですけれども、ここがミュージアムロードです。

もう一つ、今まで日本の美術館には存在感というものがなかなかない。駅名でも「美術館前」と付いているところが本当に少ない。一番近いのは阪神の岩屋駅なのですけれども、岩屋といってもここが兵庫県立美術館前というのが分かりませんので、直接阪神の社長にお会いして頼んで、駅名表示に括弧して「兵庫県立美術館前」という名前を

無理やり入れさせてもらいました。これでここへ来ると、兵庫県立美術館前だなということがすぐ分かると思います。

それから周りの商店街に応援をしてもらって、こういうレットルを貼ってもらってポスターやちらしを置いてもらうようにしています。世界的アーティストの村上隆さんに頼んで彼の店がここに来るように運動しています。

ちょうど王子動物園をでると美術館はまっすぐ見えるので、美術館の上に何か大きな動物を置きたい。オランダ人の作家で、水上に浮かぶ大きなアヒルを作っている人がいるので、私はロツテルダムにすぐ飛びまして、彼に「このダックがかわいいからぜひ乗せてくれ」と言いましたら、「だめだ」と。「やはりダックは水の中に浮いてくれ」と。「屋根の上はちょっと早い」と言われましたが、彼がかわりにつくってくれたのが、これです。いまカエルが乗っています。だんだん近づくと、このカエルがみえてきます。

これでカエルの美術館みたいになったのですけれども、世界的な建築家安藤忠雄に怒られるのではないかと肝心の私が一番恐れて、作前に許可をもらうために「こうなりますよ」と安藤さんに写真を見せました。見るなり「これは面白い」と言ってくれたので即、作り直した。そして名前も応募したところ七百通以上の葉書が来まして、名前が「美(み)かえる」になりました。

そしてエントランスが暗いので「ウェルカム」という案内をして、曲線のテレビを置きました。曲線のテレビなんてここだけだと思いま



図11 金沢21世紀美術館



図12 兵庫県立美術館



図13 ミュージアムロード命名式

す。それと北口には、女性の方はみんな知っている神戸コロッケなどを作っているお総菜屋で、全国のデパートに出ているロック・フィードというところにお金を出してもらって、飛行場の誘導灯みたいな灯を作って設置しました。

これは先週、台湾に呼ばれまして、やはり美術館がまちを変えようということで講演をしてきた一シーンです。これが私の他に講演したメンバーです。非常に面白かったです。ここに二つ、金沢での成功と、新しい集客力に関する本を書いていきますので、もしよかったら読んでもらいたいなと思います。

勉強は努力すると一定のところまでいけますけれども、やはり、若いときに美術館に行くことやいい音楽を聴くことなどの習慣を日本でも作ってもらおう、感性というものにいかに大事かということで、毎日頑張っていますので、またこれからもよろしく願います。以上です。どうもありがとうございます。(拍手)

司会 袁先生、どうもありがとうございます。

【報告3】「アジアにおける大阪とその文化」

司会 最後に関西大学文学部教授の中谷伸生先生にご報告をいただきます。先生は大坂画壇の研究で博士号を取得され、日本の近世・近代絵画史の専門家でありませけれども、本日は「アジアの中の大阪とその文化」という題で世界的な観点から大坂画壇を論じていただきます。それでは中谷先生、どうぞよろしくお願いいたします。

中谷 中谷でございます。今日は「アジアの中の大阪とその文化」ということで、大坂の絵画と中国の文化を中心としますアジアの関係ということでお話をさせていただきます。大変大きな話で、先ほど控え室で先生方に「あなたは何か今日は大きな話ですね」と冷やかされました。私がというよりもこの大阪商業大学のほうから「大きな話をやってくれ」という依頼でして、「あなたの細かい話はいらん」ということでしたので、それでこういうことになったわけです。

一つの骨格の話ということになりますが、意外と知られていない話が多いかも分かります。私は日本美術史を研究しておりますが、皆さんも日本美術史といえますのは社会科で日本史とか日本の美術を習っておられると思います。運慶、快慶、俵屋宗達、横山大観など、教科書にも出てまいりますからご存じだと思えますけれども、ただその人たちはどうして評価されたのか。

つまり、何十万人、何百万人と画家や彫刻家は日本にもいたわけです。何をもってプロというかは分かりませんが、その道で飯を食っているという人はプロであります。そのプロというのは現在日本でも何

十万人もいるわけです。その中で一人、二人、三人、四人という芸術家がどうして学校教科書に取り上げられ、つまり美術史の中で名前が出てくる。その他の九九パーセントの人は名前が出てこないわけです。これは一体どうしてそうなっているのかということは、あまり皆さん、考えないと思います。

実はこれは、明治の初めに日本美術史というものを初めて作り出した岡倉天心にさかのぼります。天心が初めて体系的な日本美術史というものを作りました。その天心が評価したわけです。それまでは美術史的な記載はありませんでしたが、バラバラの日本の美術作品をピックアップしまして、そして歴史の上で語る事ができるのは俵屋宗達だ、あるいは運慶であり快慶であるということを経史的に並べたわけです。そして歴史を作ったのです。これが日本で最初の日本美術史です。

つまり、美術作品を歴史的に述べた最初の講義を天心が東京美術学校で行ないまして、そしてそれがたちと成って、活字で残ったわけです。本人の講義録を学生たちがまとめて、それを精査したものが岡倉天心の『日本美術史』ということになります。こういうかたちです。その評価は極端に言いますと、たった一人の人、岡倉天心という一人の人物がその評価を作ったのです。そして横山大観であり、俵屋宗達という名前が残ったのです。

ただ、天心は失脚します。さまざまな問題が起こり、東京美術学校を追われます。まだ三十歳代の半ばで追われます。でも再び公の職に

就くことはありませんでした。大変な秀才です。しかも世界を知っておりますから、これだけの人物が明治の初めの日本には、ほとんど指で数えるほどしかない。それだけの秀才を明治政府は葬り去ったということなのです。

それは、いったん事件を起こしたから仕方がないだろうと皆さんは思われるかも分かりませんが、決してそうではありません。明治政府というのは若い政府ですから、かなり柔軟です。人材が乏しい。ですから、昨日の敵でも有能であれば復活させて抜てきするということは繰り返しやっております。

一例を挙げておきますと、三重県の松坂に岩橋教章という画家がおりました。この人は画家ですけれども、技術者でした。彼は幕末に五稜郭の戦いで五稜郭に立てこもりまして、官軍を迎え撃って敗れました。敗れて捕まって牢獄に入れられました。しかし、それだけの大罪を犯した人が、数年で牢から出されて官僚に抜てきされます。大変有能だったからです。画家というよりも技術者として大変有能だったからだと思います。そしてウィーンに留学させてもらい、高級官僚になります。

だから明治政府はかなり柔軟なのです。にもかかわらず、天心ほどの秀才を再び公職に取り立てなかつたというのは、それは日本の明治政府という国家に一つの方針がありまして、西洋の制度を取り入れ、西洋の文化を取り入れるという方針を明快に打ち出していたからです。それに対して天心はアジアの文化を守る、アジアの文化を中心と

するという方針でしたので、明治政府とは合わないわけです。明治政府の官僚でありましたが合わなかつたわけです。

明治政府とある種、逆のことを言う官僚は困るのです。そのこともありまして、天心は再び復活することはありませんでした。そして彼は在野で活躍しました。しかし公の職を追われた天心が作った日本美術史という体系、評価自体が葬り去られて当然だと思ふところが、本人は葬り去られたけれども、天心の作った日本美術史自体はそのままほぼ踏襲されたのです。それで百年が過ぎました。

天心を盛んに批判した美術史家たちも、評価としては天心の評価に従っている。そして、それからほぼ百年がたちました。今その評価は、少しずつ修正されておりますけれども、あまり変わらず守られてきております。

いま写っておりますのは森春溪という大坂の画家です(省略)。今この博物館の展示場にも大坂の絵画がいっぱい並んでおりますが、あれらの絵画もそうなのですけれども、こういう絵画がほとんど評価されていない。大坂の画家でなかなかきれいな絵画シリーズですけれども評価されていない。日本人は評価しない。こういうものが実はイギリスのロンドンの大英博物館にどんどん入っていつております。日本の美術館、博物館は買いません。武藤会長の話もありましたが、個人の人もあまり買いません。

私は海外流出という言葉は嫌いです。つまり、美術品は、どんどん海外に出て行ったほうがいいと思つて居るのです。日本で大事にされ

ないものは海外で大事にもらえるわけですから、それは一つの文化の発信ということにもなりますので、出て行ったほうがいいと思っ
ているのです。

私はかつて大英博物館で1年ばかり研修をしておりました。私が日本に帰って来てからうわさが流れまして、大英博物館を応援している日本人のスパイのような人がいるというのです。どうも話を聞いてみると私のような話でしたので、それは私だと言いました。

大英博物館からは、私がロンドンに行ったときには必ず寄れと言われます。ある時、大英博物館に行きましたら、これらの大坂の絵画が収蔵庫に五十点ぐらい並んでいました。そして、向こうの学芸員と議論していくのです。どれが偽物ですか、どれが本物ですかと。これはいけそうかと。ではこれを入れようということになります。

大英博物館も今いろいろ経営困難で資金もないようですが、それでも数十点単位で大坂の絵画をどんどん収蔵していつております。日本ではもう見られないものがたくさん入っております。この森春溪の作品も実際には絵画としましては、実は中国風なのです。分かりにくいのですが、中国のこれとそっくりのシリーズの画帖のようなものがあります。私はそれも確認しております。ですから、感覚としましてはアジア的なのです。アジア的という部分がどうしても日本ではあまり受けないという流れも背景には一つあります。

私が配りましたプリントの中に、東洋史の宮崎市定先生がこういうことを書いておられます。「九州から瀬戸内海を航路で運ばれた物資

などが大坂に着き、大坂から奈良を経て名古屋、伊勢へ。大坂から京を経て山陰北陸へ。大坂から瀬戸内海を通って全国各地へ。大坂から紀伊を経て土佐に至ることを重視し、江戸時代に至るまで近畿地方が外来文化輸入のターミナル基地。そして大坂は依然として日本経済の中心たる地位を保ち、大坂は日本史上仁徳天皇の御代を除き、かつて政治の中心となりしことなかりしたため、とかくその重要性が閑却されやすいが、その我が国内における東西の交通上に占むる位置の重要性はけだし絶大なものがある」と語っておられます。

こういう意見があるにもかかわらず、文化の集積ということに関しては、これまで大坂のことはあまり語られておりません。江戸時代は鎖国体制ですから、長崎が唯一の開港都市です。長崎に着いた物品は瀬戸内海を通って大坂に着きます。そして、だいたい大坂で全て降ろして、そこで仕分けをして各地に運ぶということです。

そのときに当然、長崎に入ってきた中国の絵画及びそれらを描いた長崎派の絵画が大坂に大量に輸送されてきているはずですが、ところがこれまでの日本美術史研究では、大坂は空白地域なのです。大坂の美術というのは空白になっていて、京都、江戸に話が飛んでしまつという状況があります。

これはどういうことかと言いますと、やはり天心の影響が残っておりまして、天心は大坂の絵画についてほとんど触れておりません。それから天心は、この講座でも出ておりましたが、文人画が嫌いでしたのです。文人画の評価は、この話をするときまた一時間ぐらいかかるの



図14 「虫の行列」

で止めておきますが、天心は文人画のある部分、排斥しました。ところが、江戸時代後期の大阪の絵画は、実は文人画が中心であり、橋爪先生が話されたと思います。天心の発言力はあとに残りました。そのため、大阪の絵画はすっぽり消えてしまつという事態が起こります。

美術史家というのは、作品をきちんと見る人たちではないのかと思われがちですが、意外と偏見を持って研究する人が多いようです。私の感じでは七〇パーセントの研究者がそうです。ですから、本当に自分の目で見て、この作品はそれほど知られていないけれども優れているな、ということを考えながら論文を書く研究者は少ない。それをなかなかやらない。そこにコレクションの収集の偏りというものも起こるといふことであります。

この作品「虫の行列」(図14)は大英博物館所蔵の西山芳園です。日本ではほとんど忘れられておりますが、西山芳園はなかなかうまい画家です。大坂が生んだ写生派の代表者であります。ほとんど日本では見る機会ありませんが、大英博物館はしっかり集めています。芳園はなかなか瀟洒な作品を制作しています。もう皆さん、見ていただいたら分かります。素晴らしい。ともかくいいものです。

けれども、日本人は名前で関心を示します。「西山芳園、よく知らないから、知らない」というわけです。しかし、大英博物館はどんどん入れて、今やもう、大英博物館が西山芳園の代表作を全部入れてあります。だから、この人の研究は大英博物館がメトロポリタンとかへ行かないとできない。欧米に行かないとできない。またフランスでは、パリの国会図書館が大坂の絵画を集めてあります。

一つの理由は安いからです。値段がものすごく安いので、ものによれば、私がポケットマネーで買えるぐらい安いわけです。そういうものがたくさん欧米に流出しております。これも西山芳園の大きな画卷です。今、映っているこの作品は江戸後期の写生派としてはたいしたものです。それはすごいのですが、日本人は全然関心を示しません。

さて、葛蛇玉は大坂の人。長崎に沈南蘋という中国の画家が来まして、一大ブームを引き起こしたわけですが、そのひ孫弟子にあたります。私どもの大学の図書館が買える絵画なのです。値段が分かりますね、だいたい。蛇玉の絵画は世界でただ三点しかなかった。アメリカと日本にそれぞれ合計三点ありました。これが四点目の作品で、関大

図書館に入れたのです。文徵明とか中国の絵画の影響を如実に示しております。なかなか鬼才であります。最近、東大の佐藤康宏先生がなかなか力を入れて研究・発表されて、少し浮上しつつありますが、いわゆる中国風の絵画です。

それから木村兼葭堂については連続講座でも何度も話が出たと思いますが、これが「花蝶の図」(図15)です。この大坂の木村兼葭堂は、画面の右下に「鄭山如」と記していますが、日本にやってきた沈南蘋の弟子にあたる鄭培の絵画に習って描いたということです。画面に記された澄心齋というのは木村兼葭堂のアトリ工なのですが、その澄心齋の中で描いたというふうに書いています。

つまり、江戸時代というのは中国ブランドが主流でした。中国ブランドがどれだけ上がっているかということがやはり画家たちにとって



図15 「花蝶の図」

大きな関心事で、それを買う人にとっても中国風かどうかということには非常に重要なわけです。明治以降には、趣味と価値観が逆転してまっぴら西歐志向になってしまったわけですが、兼葭堂という人物とは中国趣味の典型的な人物であります。

わざわざ中国の画家に習って描いたのだと兼葭堂はサインを入れているわけです。次に一七世紀に長崎にやってきた沈南蘋。その写生的な作品ですが、これは泉屋博古館のコレクションです。

次は浜田杏堂。大坂の絵画はすっかり忘れられて、浜田杏堂なんていつても誰も知りませんし、その辺に「ミ」のように転がされています。かわいそうなことに、これだけの画家の作品が、杏堂の画面には、「丁雲鵬に倣う」と書いてあるのです。大坂の絵画には中国画人の名前が多く出てきます。つまり、中国との密な関係があったということが一枚の絵画で説明できるわけです。だから、その意味では研究上も、日中の文化交流とか東アジアの文化を考えるときに第一級資料なんですから、研究者はほとんど関心を持たないという状況が長らく続いてきたということなのです。

次は森蘭齋という画家ですが、この人は越後の出身で、長崎に留学して、長崎で沈南蘋流の絵画を習い、一八世紀の中ごろ以降に大坂に出て、少なくとも十五年程度、ひよっとしたら二十年くらい暮らしています。長崎で最新の絵画を身につけた若い蘭齋が大坂へ来ているわけですから、十五年間大坂で何をしてきたのが重要です。

そして、森蘭齋といえば、大坂に来た後、東京に出たことが強調さ

れる。江戸に出て活躍したとなっている。要するに美術史家の立場です。美術史家の立場が強調されて「江戸で活躍した」ということで、急に大坂が飛ばされてしまつて話が移るわけです。それで大坂にはこういう絵画はやらなかったということが定説になっています。

続いて、森蘭齋の「西王母」(図16)です。桃を持っています。中国の長寿の仙人である西王母を表しておりますが、こういう割とリアルな写生。写生といいますが、いわゆる南蘋派の写生というのですが、これは実物を実際に写して描くというよりは、写生的に描いた絵画を写して描くということがだいたい主です。ですから、写生的に見えるのだけでも、実際のものを写したかどうか、それはまた別問題です。実際、こういうふうな絵画をいっぱい手本にして描くということをやっていたようではありません。

なかなかいいものです。いいものですが、これも私の研究室の中にある。日本全体がそんなことでもいいのかと。これはしかるべき美術館・博物館に入れておかないといけないでしょう。歴史的にも重要で



図16 「西王母」

あるし、作品も立派だと力説するのですけれども、叫べどもだめです。

大阪の骨董街に三年ほど前に木村兼葎堂を中心にして、人気があります伊藤若沖とかも見られる一緒に寄せ書きをした大きな絵画が売りに出ました。これは日本に残さないといけないのですが、私はとても買えないけれども、美術館にとつてはたいしたことはないと思ひ、知り合いのあちらこちらに電話して、「ちょっとこれは入れておくべきだ」「これは大阪としても、あるいは大阪でなくても入れておくべきだ」といつてだいが動いたのだけれども、どこも入れない。

結局「あっ」と言っている間にオランダの人が買って帰りました。海外にこれが出てしまいました。あれは海外に出してはいけないだろうと私は思うのだけれども、誠に残念なことが次々と起こっております。

次は岡田半江。藤堂藩の役所に勤めておりました。商大の商業史博物館にも岡田米山人の作品がいっぱい出ております。あとでまたご覧になってください。岡田半江は米山人の息子であります。これは淀川を描いております。「大川納涼図」(図17)といひまして、淀川の支流、大川を描いていて、「濠濮間想」と題字が書かれております。濠水、濮水ぼくすいというのは中国の川のことで。大坂城が遠くに見えます。

この場面は大坂のまちです。夜の大阪のまちを描いております。詩がところどころに入っているのですけれども、それを見ますと、「これは淀川の絵画だけれども、実は中国の揚子江をここに重ねているの

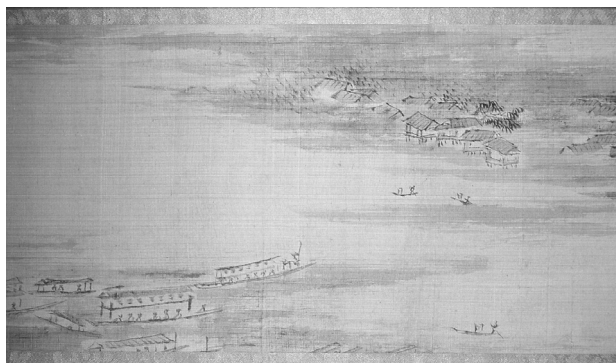


図17 「大川納涼図」

ですよ」ということははっきりとうたっているのです。だから、日本の川であり、そしてまた中国の川であるその川を重ねて描いているのです。いかに大坂の画家たちが、中国にあこがれて、大陸というものを頭に置きながら大坂の風景を描いたかということが典型的に分かる一点であります。

プリントの活字のほうの二枚目の真中に岡田半江とありますが、なかなか人間関係が面白い。「岡田半江山水図巻大川納

涼図における文人交流の図式」というものがありまして、この一枚の絵画には、最後のところに賛がありまして、この巻物に関しての記述があります。かつて描かれた巻物を手に入れた半江という人物が、岡田半江の友人です。

半江の友人の半江が手に入れて持っていたのですけれども、家が落ちぶれた。家が落ちぶれて子孫がこれ売りに出した。売りに出したものを藤井藍田という画家が手に入れて、広瀬旭荘に跋を書いてくれと言って彼が持ってきたのだということが書いてあります。藤井藍田

は旭荘の弟子にあります。このドラマチックな図巻の運命がここに書いてあるのです。それを見ますと、もともと中国絵画などの影響から描かれているのですが、岡田半江がこれを描き、その友人の半江にそれが渡り、そして広瀬旭荘、藤井藍田、田能村竹田、八木巽処、巽処は木村兼葭堂の助手のような人です。そして、木村兼葭堂へつながり、また岡田米山人は半江の父親で、半江はその息子というふうに、人間のつながりの連鎖というものがこの一枚の絵画から理解できます。そういう東アジアの絵画の中の一点であります。

こういうことを見ていきますと、大坂の絵画というものは、東アジアの文化を考える上で重要ですが、その中でも半江の絵画というものが東アジアの雰囲気濃厚に示しておりますので非常に重要であります。しかし、それがすっかり忘れられて、そして今なおまだ、あまり顧みられようとはしていないという状況について、これは何とかしないといけないと私も思っておりますが、今後どうなっていくべきか。我々が力を入れないといけないだろうと考えております。

そして、最後の段でもう一度大きな話に戻りたいと思います。夜の大坂、いいですね。しゃれたものであります。次は、中井藍江という大坂の画家です。ざっくりとした絵画ですが、鹿がおりまして、やはり中国風の図様をそのまま使っております。鹿(ろく)は給料の碌(ろく)と音がつながるといっているのでお金もうけになると。大坂の人たちは実利的な人たちだから、鹿や猿を描いたといわれます。猿は猿猴(え

んこう」と言いますが、侯(こう)に通じるから立身出世につながる、大坂で人気があったといわれます。

中国では鹿とか猿は吉祥の図様です。古代から描かれております。それが大坂に入ってきますから、やはり大坂の商人や大坂の人たちもお金もうけだけではありません。やはり、吉祥の高い理想ということをこれらの絵画の中に託したということを見逃してはならないと思います。

最後に、そういうかたちで天心が作りました日本美術史が、さまざまに功罪がありまして、今は罪のほうを語ってきました。天心のために大坂の絵画が忘れられてしまったではないかということを私は申し上げましたけれども、しかし、もう一度この日本の美術を東アジアの美術の中に位置つけて考えるとしましたら、何と皮肉なことに、もう一度天心の美術史を出してこないといけないことになります。

天心は「日本美術史」を作りましたが、その美術史というのは、日本の美術を全てアジアの中で語っております。まずインドから語り始めて中国を語ってきて、そして日本の美術に入ります。必ず中国とアジアの美術の関係で日本美術を述べてきました。ですから、もう一度我々はそのところへ返っていかないといいけないと思います。天心を否定しながらも、もう一回彼の意見を取り入れていく必要があるということです。新しい美術史の方では「東アジア美術史」という言葉が徐々に定着してきております。

つまり、「日本美術史」という枠組みは一国の歴史です。日本人が

日本の美術を日本で研究するという枠組み自体が壊れてきているわけです。浮世絵も私らの学生時代は、日本独自のものだと言われまして。このごろの研究では、中国の版本をいっぱい取り入れているということが分かってきました。

そういう流れが来ておりますので、もう一度、岡倉天心の意見も取り入れまして、東アジアの美術というものを考える際に大坂の絵画というものを考えるという大変重要な局面を迎えているということだと思います。こうした研究を欧米だけには任せておけない。欧米でなくて、まさにこれは日本人がやらないといけないだろう、というふうに見えるわけであります。以上です。(拍手)

司会 中谷先生、どうもありがとうございました。それではただいまより十五分間の休憩を取らせていただきます。そのあとパネルディスカッションに入りたいと思います。

(休憩)

【パネルディスカッション】

司会 それでは、準備ができましたようですので、パネルディスカッションを始めたいと思います。コーディネーターは、当館主席学芸員の明尾圭造でございます。よろしくお願いいたします。

(拍手)

明尾 皆さんこんにちは。コーディネーターを務めさせていただきます

す商業史博物館主席学芸員の明尾でございます。どうぞよろしくお願
いいたします。講演の皆さま、本当に熱いお話をいただきましてあり
がとうございます。順次、皆さま方にも少しお話を聞きしながら、
今回の私どもの統一テーマである「商都大阪の文化力」につきまして
お話を頂戴したいと思しますので、今しばらくよろしくお願いいたし
ます。

私どもで今年度の統一テーマは「商都大阪の文化力」ということで
まず組ませていただきましたが、展覧会は「近世浪華の町人と文人趣
味」というテーマで、商業史博物館の二階に展示しています。作品と
しましては、先ほど中谷先生からもご紹介のありました、岡田米山人
や木村蒨葎堂などの作品が並んでおりますのでご覧いただければと思
います。

最初に、私ども大阪商業大学でなぜこの「商都大阪の文化力」とい
う事業企画したのかを話させていただきます。先ほどから、皆さまの
お話にも出ておりましたが、大阪の文化を美術史だけでとらえるので
はなく、少し大きな文化全体でどうとらえていくか。ここは商業大学
ですから、商業史の一環として絵画を考えたらどうなるか。その観点
から展示をし、それから、連続講座も五回組ませていただいた。

ちょうど展示が立ち上がって一週間です。それで、今回のシンポジ
ウムということになっております。先ほど中谷先生のお話にありま
したように、どんどん大阪の資料がイギリスを含めてヨーロッパやア
メリカに流出しているということです。先生は、どんどん流出してか

まわらない。流出とは言わずに、「きちんと扱ってくれるところで持つ
てくれたらいいのだ」ということでしたのですが、私はちょっと考え
が違いまして、やはり大阪に留めたい。皆さんといっしょに、大阪の
文化を味わっていきたいというふうに考えております。

今回は大坂の文人画が、皆さんにもう一度大阪文化の奥深さを味
わっていただくにはいちはばいい対象ではないかということで展示企
画させていただいたのです。それを考える上で、いま経済界の中か
ら、まず武藤治太さんにご登場いただきました。今日はコレクション
の話をしていただきました。祖父に当たられる武藤三治コレクション
の話をしていただきました。それから、ここは商業大学の中に商業史
博物館という大学の博物館がございますので、ミュージアムの果たす
べき役割。それは国内外で活躍されておられます蓑豊先生にお話をい
ただいた。もう一つは、大坂画壇といわれる作品の中でも、先ほど申
し上げたように文人画がやはり非常に重要だという観点の中から、ア
ジアの中の大阪というふうな観点で中谷伸生先生に話をしていただき
ました。

皆さま方、本当によいお話をしていただきました。私もこの高揚感
のまま帰ってしまいたいと思っておりますが、パネルディスカッ
ションですので、お一人ずつ、もう少しお話を聞かせていただくとい
うことなのです。まず武藤会長から少しお話を聞かせただけなら
と思えます。

大阪はもちろん個人のコレクションをなさる上で、武藤山治の例を

挙げてお話をしていただきました中で、例えばあまり人の意見は聞かずに、自分の意見や判断でものを集めていくのだということは、大坂の文人画の集い、仲間内での集まりの中でもそれぞれ自分の考えで楽しみながらやっているという、自娛の精神につながるのだと思います。企画展でも自娛（自ら楽しむ）という感覚が非常に重要ではないかと思っております。

いま武藤会長からもコレクターとしての側面をお話しいただいたのですが、いろいろと資料をお求めになる際に、「ご自身の目、それから、あまり学者に聞くといいことがない」という話も先ほどされていたのですが、その辺りのことで少しお話をお聞かせいただけましたらと思います。

武藤 学者の方に聞くことが悪いとは私は決して思わないのですけれども、やはり自分の感性がありますから、自分がいいと思えば自分で買った方がいいと思うのです。それでも、やはりお金を投じて買うからには祖父と違いまして、偽物をつかまされたらかなわないという気は片方にあります。だけれども、私は鑑定書が付いていなくてもいいと思えば買います。

それでも、やはり卑近な例ですけれども、それを知っている方がここにいらつしやるのでちょっと話しづらいですけれども、鴨居玲という超有名な作家をご存じでしょう。私も鴨居玲のものは鬼気迫る絵なのでどうかという気もしないでもないのですけれども、何かひかれる作家なのです。先般、私のところへ鴨居玲のデッサンが一枚持ち込ま

れたのです。私が見た限りではいいと思うのだけれども、家内などは「ちょっとこれはやめといたらどうですか」というようなことなのです。今はちょっとペンディングにしているのですけれども、家内に言ったのは、株を買えばお前も十万、二十万は損をしているではないか。それを思えばかまわないのではないかというような話もしたのです。

私は、やはり自分の感性を信じて買う。学者の意見を聞いたらだめだとは絶対に言いませんけれども、私は自分で見ます。私は鑑定書のないものでも買います。

明尾 ありがとうございます。やはり大坂の、例えば木村兼葭堂にしても岡田米山人にせよ、みんなそういう文人の集い、サロンのようなところがございまして、それぞれが絵を描き、俳句を詠んだりという中で、みんな自分に自信を持った人たちの集まりであったのではないかと思うのです。何かから何まで人任せではなく、今も武藤会長がおっしゃったように、これはいいという自身の感覚がまずあって、最後のひと押しを研究者や学者の方に聞かれるというのが本筋のコレクションのされ方ではないかと思うのです。

例えば、先ほども大阪市立美術館に小西家の資料の話をされてきました。それから、与謝蕪村の「夜色楼台図」はもう国宝でございますが、与謝蕪村の代表作でもございます。そういった作品は、いまやはり美術館や博物館にお預けになっておられたり、あるいは寄贈で入っておられたりします。大阪市立美術館では蓑さんが前館長でおられ

たということ、例えば大阪の美術館は住友家の本邸があったところで、あの土地と建物を含めて住友家から入っております。それから、大阪城の天守閣と旧博物館も府民市民の寄附金でできたものでございます。中之島の図書館も住友家の寄贈でできたものです。東洋陶磁美術館にしても、最終的には住友家のバックアップでできているということになりますと、大阪府も市も公立とは言いながらどうやら自らの資金だけで作ったものではないわけです。

もう一つ言いますと、中に入っているコレクションも、やはり財界の方のコレクションが中心になっていることからいきますと、大阪はそういう意味で、我々市民府民の個人の力で成り立っているというのは、やはり非常に大きなことではないかなと思うわけです。

その中でも、コレクションの形成に関して、前大阪市立美術館の館長をされておられました蓑さんに、収蔵される作品資料の活用について。それから、いま例えば寄贈で入れるとしてもヨーロッパやアメリカでは、税法上の優遇が適用されると聞いておりますが、日本はそれが進まず、皆さん寄贈等なかなか難しいということもあるかと思えます。ヨーロッパやアメリカの事情も含めて、資料の寄贈活用ということも含めて、蓑先生その観点でお話いただけたらと思います。

蓑 これは大変な違いだと思いますけれども、特にアメリカの美術館の九〇パーセントは財団ですから、日本とは本当にまるつきり反対です。もちろん購入するところもございますけれども、各美術館は個人の寄贈で成り立っています。購入といつても、個人のお金をいただきたい

てその基金で買っていますから、完全に皆さんの税金からではないです。日本の場合は本当に寄付をすればするほど税務署から調べられますので、寄付するということは非常に難しい状態です。

だから、日本の政府がお金を出さないならば、そういうところで免税措置を取れば、もともっと素晴らしいコレクションができると思います。個人個人の美術館も、公設美術館でも寄付をした人の名を冠した、例えば「ムラヤマルム」などのようにしていけば、美術館とというのはもっと大きくなっていくと思います。どうも明治以来まだまだ財務省というところ、いかにしてお金を取るかということしか頭にはないですから、もつそろそろ免除するようなシステムにしてもらいたいなと思います。

私自身、アメリカに三十年いましたので、その間ずっと美術館の仕事をしています、やはり日本と大きな違いがありました。例えば私が見つけて来たこの作品をどうしても買ってほしいと。そうすると、美術館にあるいろいろな基金の中から集めて、それでも足りない場合はその委員会、私がいたシカゴ美術館はアメリカの三大美術館の一つですから、非常に巨大で従業員も八〇〇人いて百億以上のお金を毎年使っているくらいの巨大な美術館です。私はアジア部でしたから、アジア部でそれぞれ理事会をひらきます。

そこでこういう作品を買ってくださいと、しかしこれだけの基金がありませんけれども、あと一千万円足りませんからお願いしますというのと、その場でみなさんが小切手を出して切ってください。」この美術

館に部長がこれがほしいと言つたら買おうではないか」ということで、即、みなさんが小切手を書いてくれます。これは日本では到底考えられない場面ですが、実際に私は見えています。日本もいずれそうなってくればいいと思います。それはこれから二十年、三十年後だと思えます。

やはりそういうところが大きな違いですが、それでも大阪市立美術館の場合は東京の美術館と違って、個人の目で集めてそれを美術館に寄贈するという、これは東京では考えられないです。東京の場合は、いろいろな学者さんに聞いて「これは本当にいいんだな」と言つてやっとお金を出す。だから、なかなかいいものが集まらない。その間に大阪の人に買われて、それがまたいずれ美術館に寄贈されているというのが現状だと思えます。

特に尾形光琳関係資料は、武藤家からいただいた日本でも大変有数なコレクションです。いま京都国立博物館に行つていますけれども、もともとは文化庁が購入したのですけれども、それが小西家文書で一旦まとまりだつたのです。それがどういふ理由で分かれたのかはつきり武藤さんも言えないと思えますけれども、大阪に半分来て、半分は京都国立博物館に今はあります。私が大阪市立美術館にいた時には、文化庁から「せつかく大阪市立美術館に半分があるのだから、残りの半分も預つてください」ということで、数年間は大阪市立美術館に全部小西家文書があつたのですけれども、私が出てから文化庁は京都国立博物館のほうへ持つて行つてしまつたのです。

本当は、大阪市立美術館に行けば尾形光琳関係資料が全部見られるような状態にしてくればいいのですけれども、どうも国はやはり大阪市と国と違つので、なかなかそこは許してもらえなかつたのです。そういうところはもう少し融通を利かせて、一力所で見られるようなシステムにすればいいと思つのです。

明尾 やはり、国に対しても養先生ぐらいモノが言える館長さん自身治体を持つというのは非常に重要なことではないかと思つます。今もおっしゃられたように、出られたらすぐに京都国立博物館に行つてしまつたというの、そういう関係もあるのかもわかりません。

やはり個人の寄贈も含めて、東京とは違つという話が出たのが、最初に伊木館長が「徳の経営」、それが社会貢献を果たしているのだという話をされました。それに関しまして、具体的な事例をお話しいただけたらと思つます。

伊木 江戸時代の大阪商人の社会貢献について「徳の経営」ということを言いましたけれども、現代日本の企業経営の社会貢献とか、CSR (corporate social responsibility) やフィランソピーとかメセナとか、もつとさかのぼつても明治時代のノリタケの森村市左衛門とか、多くは欧米の影響でやり出したのです。

倉紡の大原孫三郎もヨーロッパの影響で社会貢献しないといけないのだと、つまりキリスト教に富者の義務 (ノブレス・オブリージュ) といったことがあります。今日のCSR、企業の社会的責任というのももともと欧米的な考えで、日本の企業もグローバル・スタンダード

でやらないといけないということで、一斉にCSR活動に取り組むようになったと言われています。

ところが、上方の歴史を見ると大阪だけではなく近江商人も含めてですが、関西の商人というのは商売をやる上で誰に教えられたわけでもなく、社会の中で生きていくためには社会へ「おかげさまで」という感謝の念を表さなければいけないということで、それぞれの分に応じることができることをやったのではないか。心齋橋や淀屋橋といった橋を造ったりしたのもその一例だろう。これが端的に言うと、近江商人の「三方良し」の考えにも通じている。

それが、近代以後どうなったかという点、近代はもちろん西洋の影響も受けるのですが、しかし、やはり先ほどから出ていますように、住友家の大阪市への文化施設の寄贈とか、それ以外にも大阪に集まった明治の新興の企業家が立派な社会貢献をしているのです。

当時は社会的に貧困の問題が大きく福祉の分野の活動が多いのですが、日本生命を作った創業者の一人、弘世助太郎や、山口玄洞といったいろいろな近代の企業家が、貧しい人たちのための病院を作ったりして社会に貢献する。江戸時代の伝統が切れたのではなく、断続的に関西の企業の風土に受け継がれていた。戦前のカネボウの武藤山治さんでもそうですけれども、事業からはみ出して國民會館というような国民のための文化貢献活動というのをやられている。

もう一つ例を挙げますと、サントリーの創業者の鳥井信治郎というのは、「三方良し」にも通ずる考えですが、「利益三分主義」というこ

とを言いました。企業がもうけた利益はお客様・社会のおかげであり、利益三分で会社とお客様と社会に還元する。そういう考えにもとづいて社会福祉とか学問・教育の振興に力を尽くした。ほかにもたくさん例がありますので、江戸時代の関西商人の社会貢献の気風は、近代の企業家にまでつながったのではないかと思います。

明尾 國民會館の話が出ましたが、私も何度か武藤会長のお部屋に寄せていただきました時に、カーテンが開きますと大阪城が真正面にございまして、本当に大阪の一等地に建っている感覚がいたします。講演会はもう九百回を超え、政財界、文学・歴史の方々など分野を問わずに開催しておられるということですが、いつから始められたのでしょうか。國民會館の講座のことについてお話しただけならと思います。

武藤 先ほどもちよつと触れたのですけれども、武藤山治は政治活動を八年間議員として行っただのですけれども、彼は当時としては斬新な主張をやっているわけです。例えば、国鉄の民営化とか郵政の民営化というのを、今から八十年前に唱えているのです。しかし、その実現というのは全然なされなかつたわけです。それと、普通選挙が採用されたばかりで非常に買収行為が横行したわけです。そういうことに対して、非常に正義漢ですから憤懣やる方なかつたわけです。

何とかそれを変えていかなければいけないということで、いろいろと努力をしたのだけれども、なかなか自分の理想が実現できないということ、これはだめだと。国民の政治教育、国民の意識を向上しな

ければやはりこれはだめだという具合に考えまして、当時のお金で五十万円出しまして国民會館を作ったわけです。

ところが、先ほどもお話ししましたように、途中から時事新報の経営を依頼されましたので、そちらのほうに力を注がざるを得なくなったということ、昭和八年に国民會館は出来上がったのですけれども、彼はその開館式の一回だけしか自分の作った理想の殿堂に行っていないのです。その後、ずっと東京におりまして時事新報の再建に努力しておったということで、実際に講演が始まりましたのは彼が死んだ昭和九年三月以降、十月から第一回の武藤記念講座が始まって、現在九六五回になっております。

政治教育があくまで主體ですから、政治・経済ということが主體で、それに彼も文化人でございましたので文化関係のものも入れておるとい趣旨でございます。会員制なのですけれども、現在八八〇名の会員がおります。会費は年二〇〇〇円でございます。もしご興味がある方がいらつしやいましたら、ぜひお入りください。ただし、なかなかやめませんのでちょっと順番待ちになります。二〇〇〇円では全然もう赤字なのです。これは案内書の郵送代だけなのです。それでも足が出るぐらいなのですけれども、これは公益社団法人の使命でございますので、これは絶対に続けていかなければいけない。

おそらく、こういう記念講座というのは高野山の講座がいちばん日本で古く、いちばんたくさんやっているとありますが、それに次ぐ講座という具合に自負しております。

明尾 ありがとうございます。皆さん国民會館そばまで行ってみられたら、本当に大阪城の前でして、府庁よりも景色がずっとよろしいです。遮るものがなくて大阪城の天守閣が真正面に見えるところですので、なかなか空気がないそうですけれども、ぜひ会員になって皆さんも講座を聞きに行かれたらと思います。

私どもの今日の講座もそうなのですが、中谷先生、関西大学でも各種講座があり、今は東アジアの中での研究をされておられるのですが、先ほど図書館で大坂画壇を購入しているという話をされました。図書館ですから、それほど費用はたいしたことありませんとおっしゃっていましたけれども、結構たいした費用で買っておられるのです。

なぜ、図書館でも買える価格帯で大坂の絵が出ているのかというのは、人気がないということももちろんあるのでしょうかけれども、これは江戸のものでも京都のものでもなくて、文人画というのはほとんどが大坂の町の中から出てきたものですね。

中谷 ええ、そうです。

明尾 出てきたものが今の状態になるがゆえに、先生が例えば大英博物館で調査依頼をお受けになられたり、例えば、私も、佐藤魚大という人の研究で博士号を取ったイギリス人がいるという話を聞きますと非常に恐ろしい気持ちです。我々、大阪の人間としてこれを流出というか、出てもいいのだと先生はおっしゃったのですが、何とか留めて大阪でやりたいと考えている私どもといたら、どういふう

に展開していけばいいでしょうか。

中谷 いや、私も聞きたいぐらいです。私も大坂の絵画が大坂に残ってもらいたいとも思っているのです。大阪がやはり一つのコレクションを大坂の絵画で作るべきだと思っています。だけど、この何十年もやってきて諦めも出てきました。そうしたら、海外の人たちが熱心に行っている。大阪だったら刷りものみたいなものが出てきても、名前を知らなかったら捨ててしまうということも起こるのです。そういうものをイギリスでもアメリカでも、あるいはフランスでも日本人が捨ててもいいやというものを大事に扱って、大英博物館でも全部薄用紙で巻いて棚に一枚一枚保存しているのです。それを見ると、こんなに大事にされるのかと。そうしたら出て行ってもいいという、半分やけっぱちの気持ちです。そういう思いであります。

だからどうすればいいかというのは難しいのですけれども、関大の図書館でその絵画とはいったいどういう位置づけなのかと皆さん思われるかもわかりませんが、それは本なのです。図書館ですから、本を入れていくのです。私どもの図書館に絵画を入れるにはやはり苦労があったのです。

それは私の先生の、もう退職されましたが山岡泰造先生という方と二人で、京都、大阪の骨董街を毎週のように回りました。もう授業をやっている暇もないほど忙しかったと思います。どんどん回って真贋を判定して買って来るのですが、図書館へ持って行くと「これは何ですか。本ではありませんね」と言うのです。

最初に持って言ったのが菊池芳文の作品で、なんとも大きいのです。出品作で横がメートル三〇センチぐらいあるばかりでかい絵画を、その私の先生が図書館に持ち込んで「これを買ってくれ」と。いや、これは本ではないとすぐわかりますよね。そうしたら、きつぷのいい女性の次長があらまして、「まあ、いいじゃないの。本だわ」とか何かおっしゃって、それで入ったのですけれども、書棚にそれを入れると長いので、書棚からポコッと出ているのです。

それでほかの教員がこれは何だと、これは本ではないと言い出してややこしくなったのです。これは貴重図書だから金庫に入れないといけないということになって、全部金庫に入れたりしました。そういうことでなかなか苦労があつて、図書館も今のコレクションを形成しましたから、そんなに楽にはやってきていないのです。ただ、金額的には安かったと思います。お金のことはかり話すと批判されますけれども、お金のこともわからないと美術史研究は難しいというのが私の持論であります。やはり実感が無いものは、なかなか難しい。

木村兼葭堂とその周辺の儒者たちの合作の扇面がありまして、これは通信販売で買いました。出ていた目録を見ますと、何か真っ黒でよくわからないと先生と話していて、三千円なら偽物でも面白いではないかと言って、通信販売で届いたのですが、調べてみると本物だったのです。そういう段階から始めました。ですから、安いものは数千円、数万円から、高いものでも十万円を超えてくると図書館の人は「十万もするのですか」と言われて、「こちらが「えっ」と叫び声を上

げました。このような状況でしたから、それほど高いものは買わなかったのです。その頃は誰も買いませんでしたので、それなりのものが集まりました。もうちょっとお金を出してくれればさらに良かったのですが……。

コレクターの方もいらっしゃいますから言いますと、コレクションというのは、自分の給料で買うにはちょっとどうか、ギリギリかな、厳しいかなというくらい頑張ったものは、あとに残るものがあったてなかなかいと言います。本当に安いと思って買ったものはもう一つだと言われますから、その辺の難しいことがあるのですが、結局、欧米は安いのでどんどん買って行っていきます。日本もなかなか状況は厳しいのですけれども、やはりこういうシンポジウムなどを何度も打ちまして、展覧会も打ってもらって知名度を高めていく、重要だということをお訴えていかないことには、いくら叫んでも難しいだろうという気がします。

ですから、逆に海外から評判が上がってくると、日本人も動くというところもあるのです。その意味でも、もう海外に買ってもらうのもいいのではないですか。大英博物館でどんどん展覧会をやれば今度は逆に日本が動くかもしれません。伊藤若沖といえ、いまは大変な人気があります。展覧会でも入館者がどんどん入ります。けれども、若沖はジョー・プライスが毎年京都に来るたびに十万円、二十万円で買って帰ったわけですね。それがあの大きなコレクションです。いろいろと真贋取り混ぜてあるのですが、若沖はいまや何千万もするわけですか

ら、そういう時期が必ず一時あるということですね。やはり繰り返し訴えていく、展覧会を打ってもらう、あるいはシンポジウムをやってもらうということではないですか。

明尾 かなり繰り返し私もやってきましたが、なかなか反応がありません。これは中谷先生もそうだと思うのですが、やはり途中で諦めるところまで終わってしまいますので、繰り返ししていかないといいない。やはり、養さんが金沢で活躍されているように。

特に、大阪におられた時の養さんはあべのAPOロの地下道の辺りでもよくお見かけしたのです。どこへ行かれていたのですかと伺いますと、「お昼にいろいろなところへ行くんだよ」というご返事でした。

養さんにいろいろと教えていただいたことの一つは、その地域にどんな出なさいということですね。私も大阪商業大学に生まれて、唯一実践させていただいておりますのは、ここは商店街が七つございまして、まずはそこへお昼を食べに行くこと。昨日は中華で、今日は蕎麦を食べに行くということで、この博物館の企画などもちょっと紹介をさせていただくという、これは地域に密着していくことだとおもうのです。

例えば、先ほど、養先生からご紹介をいただいたヨーロッパ、アメリカの先進美術館の事例もそうなのですが、例えば、養先生の『超〈集客力〉革命』という本の中でもおっしゃっておられることは、地域に根差してアイデンティティーを持ちなさいということをおっしゃっておられます。

私どもは、この商業大学の商業史博物館として、資料はきちんとしたものを持ちながらこのアイデンティティーを出しつつ、なかなか大阪の市民、府民の皆さんに響いてこない大坂画壇の普及を、商業史の一環としてやっていくということなのですが、活動していく上で、蓑さんにも、少しその観点でご意見を頂戴できたら。こういうふうを活用したらどうかということをお話しただけだと思います。

襄 私がいかにアメリカで感じたのは、美術館も音楽もそうですけれども、町に非常に密着しているのです。それで町の人はすごいプライドを持っているわけです。自分の町の誇りなのでお客さんが来たり身内の人が訪ねたりした時に、必ず美術館やシアター、音楽に連れて行くという習慣になっているのを自分の肌で感じていました。行くところサートのメンバーになったり、シアターのメンバーになったり、自然に入っていくことが非常にうらやましかった。

バブルの時に日本がたくさんテーマパークというものを作りました。テーマパークは長く続いています。残っているのは本当にディズニランドぐらいだと思います。それがなぜ密着しなかったかというところ、町も県もお金を出して町に誘致しているのです。けれども、お客さんたちはテーマパークに行ってほとんどのお金を使い込んでしまいますから、余ったお金で町へ戻って買いたいものを買ったり、食べたり飲んだりしなかったのです。あれだけのお金を投じたのですけれども、結局一回限りで、また他のテーマパークへ行く。またそちらへ行ってしまうから、そういうところであまりいかない。

だけど、なぜそうだったかというところ、やはり町に貢献しなかったからです。町の住民には特別料金にするとか無料日を作るとか、そういうふうにすればもっと住民がそのテーマパークへ行っただけでいいです。金沢でそれを私はやったのです。町へ出て、美術館へ来れば必ず皆さんにも貢献します、と。いずれお客さんが必ず訪ねますということとを説いて百回以上私は講演しました。だから、それが今の金沢になっているのです。

美術館は町の人に好かれ、町にとってすごく大事な施設だということとをどうしても伝える。それには私もいろいろなレストランに行ったり、一つの同じレストランに行くこと怒られますので、あらゆるお店に行つて食べて、自分で投資して、その都度チラシを置いたりポスターを貼ってもらったり、今でも兵庫で同じようなことをみんなにさせています。

やはりその積み重ねによって町に貢献していくし、町も、美術館が来てこんなうちにお客が来るようになった。いい展示会があることによってレストランが常に混みますから、もう一目瞭然です。そういうことが皆さんにやっと浸透してきたおかげで、美術館の入場者も増えていくわけです。やはりリピーターがなければ入場者というのは増えないのです。外のお客のことばかりを考えていたら、絶対にお客は増えない。

だから金沢で、だいたいみんな年に二、三回は行っていると思えます。そうでないと、四五万人しかないあの小さな町で一五〇万人が

毎年維持できるというのは、リピーターがすごく多いから今の金沢になつていと思うのです。神戸も同じようにリピーターを増やすことを、いま毎週音楽コンサートを、やっています。年に百回やります。そうすると地元の人がフリーで素晴らしいクラシックの音楽を聞けるわけですから、常にリピーターがいます。だいたい二〇〇〜三〇〇人は毎週来ますので、そうすると展覧会を何もしていなくてもお客が常に来てくれるということで、やはり水際の中にぎわいを作るということがすごく大事です。

それには、やはり皆さんに宣伝をする、館長自らそういうレストランやお店に行つて買ひものをする。それが十年、二十年後に必ず戻つて来ると私は信じていますし、金沢でそれを実際に自分が見ました。やはりそれを日本全国の美術館の館長がそういう気持ちで美術館を運営していけば、日本の美術館はもっとたくさんの方が来てくれると私は信じています。

明尾 ありがとうございます。

最後に皆さんに一言ずつ、商都大阪の文化力というテーマタイトルに関しまして、あるいは今日のお話の中でも一言語っておきたかったことも含めまして、順番にお話しただけならと思えます。武藤会長から一言ずつお願いいたします。

武藤 私は、いまその入口のところで販売しています『大阪春秋』という季刊誌があるのですけれども、それにちょっと前から連載しているのです。そのテーマとしましては、私は織維人ですので、織維に

関連する事項についてのエッセイということで書いています。すごく大阪というところはいろいろなことがあります。

いま当面書いていますのは、ご承知の方もいらっしゃると思いますが、本町の綿業会馆というのがあることとか、大阪市立美術館とか。いま書いていますのが、安宅産業の関係で東洋陶磁美術館のことを書いています。いろいろと調べて書いていますと、次から次へといろいろなことが出てくるのです。

今後、書こうかと思つていますのは、先ほどもちょっとお話ししました芭蕉のことなのです。ご存じない方も多々いらっしゃると思ひますけれども、芭蕉というのは大阪で死んでいるのです。しかも亡くなつたところが、実は私どもの会社が建つているダイワボウのビルのごろで死んでいるのです。

いまの御堂筋はすごく幅が広いですが、かつて元禄時代は南御堂に付属している墓地に参拝する人たちに花を商う花屋があつたのです。花屋仁左衛門という大きな花屋さんが現在の私どものビルのごろにあつたのだそうです。花屋さんは金持ちですから俳諧の道を志して芭蕉の弟子だつたのです。芭蕉が大阪へ来たなら必ず花屋さんのところに泊つていたらしいのです。

このことを、芥川龍之介が小説に書いています。その小説は芭蕉が花屋に泊つて終焉するところなのですけれども、今度、ここを取り上げて書こうと思つていいます。新潮文庫か岩波文庫にありますけれども、『枯野抄』という小説があります。これは芥川龍之介が芭蕉

の終焉の場面を書いたものです。有名な「旅に病むで夢は枯野をかけためぐる」という、それにちなんだ小説ですけども、ものすごく迫力があります。そういうようなこともございますので、大阪というのは非常に懐が深いという具合に思っております。

明尾 ありがとうございます。ちょうど御堂筋沿いの分離帯のところに、たしか石柱が立っております。じつと見ていると車にひかれるから気をつけないといけませんけれども、皆さんもまたご覧になってください。ありがとうございます。では、養先生お願いします。

養 天王寺で大阪市立美術館の館長をさせて頂いて十一年です。大阪の、東京との大きな違いは、まず懐が深いし、いいものを持つていても寄贈してくれるという素晴らしい町なんです。実際に美術館でいま所蔵しているものも、だいたいが寄贈品ですから、東京の美術館との大きな違いはそこだと思います。いま、ちょうど阿倍野で近鉄が三〇〇メートルの日本一の建物を造っていますけれども、その一六階に新しい美術館を造るので、私もそこのお手伝いをさせて頂いています。

その美術館は所蔵はしないのですけれども、いい展示会を常に年に四、五回やるつもりです。近鉄というと、奈良に素晴らしい神社仏閣があるので、必ず年に一回は、例えば東大寺や興福寺の名品展をやるうということをいっています。オープンは一〇一四年の春です。西洋のものもやりますし、日本のものももちろんやります。すごく大事な展示会をこれから天王寺の美術館とも連携して次々と、いい展示

会をしていきたいと思えます。新しい名所になると思えますので、また皆さん、ぜひ楽しみにしてほしいと思えます。

明尾 ありがとうございます。同じ近鉄沿線ですので、ぜひ商大の資料もお忘れなく、またお声を掛けていただきましてよろしくお願いいたします。それでは、中谷先生お願いいたします。

中谷 今も養館長からお話が出ましたが、京都の画家はみんな有名です。相当マイナーな画家でも、京都はほとんどん展覧会をやっています。甲斐庄楠音とか都路華香とか玉村方久斗などいろいろと、ほとんどん美術館がやって有名になっていくのです。大阪はあまりやりません。大阪のことばかりやれと言っているわけではないのです。大阪もやりフェルメールも見て、そして大阪の美術・文化というものを紹介していく催しもやってもらいたい。

京都に比べて、大阪はやはり発信力が全体的に弱いですね。京都は、私はやり過ぎだと思のですが、それぐらいやっているわけです。それで京都の人たちが京都の文化を支えているのです。ですから、大阪で考えると、大阪の我々が大阪の文化を自分たちで支えているというハングリー精神ですね。文化に対するハングリー精神というか、それがないとやはりなかなか難しいと思えます。

大阪の文化というのはなかなか優れていると思えます。先ほど私が図版をお見せしましたけれども、岡田半江は夜に友達と船着場に集まって、それで酒を飲みながら大坂の夜の星を眺めて「すごいな」と言っているわけです。それはもうすごく豊かな文化なのです。個人的

ではありませんが、すごく深い文化だと思います。

ですから、それをもう一回、現代のかたちでこの商業史博物館でもいいので文人画を見に来て、帰りにその辺の喫茶店で「今日の文人画はどうや、ようわからなかったな。どうなんや」ということをちよつと話す。それが自分たちのこの地域の文化、自分たちの社会というものを応援していくことになります。そのことによつて自分も学ぶということなので、何かそういう文化を作っていけばいいのかという気がするわけです。だから、もう一回その文人的な文化を現代に生かして、見て話して支えるというような、そういう気概を我々も持つべきではないかという気がします。

美術品を見たり、何か歴史的なものを見たりしても、あまりお金は掛りません。展覧会もちよつとこの頃高いですけども千数百円で見られますから。パチンコをしてもすぐ負けますでしょう。それと比べたら教養も高まり、これくらい安いものはない。生涯、歳をとつても学ぶことができます。美術作品というのは、年齢に関係なく学ぶことができますから、ぜひ大阪の人が大阪の文化を支えていく。そして美術館も時々大阪ものをやつていただくというかたちでやれば、徐々に盛り上がっていくのではないかと思います。

明尾 ありがとうございます。『超〈集客力〉革命』の中で養先生がおっしゃっておられるのは、大きな転換ももちろん必要だけれども、地域に根差した企画というのを書いておられますので、きっと大坂画壇のことももう頭の中にはきつと入れていただけていると。いや、

きつとそうだと私は信じておりますので、またぜひ近鉄のほうでも、兵庫県立美術館のほうでも構いませんので、大坂画壇も企画化していただけたらと思います。

それでは、最後に伊木館長から、総括をお願いいたします。

伊木 皆さん、今日は長時間どうもありがとうございます。まとめということにはならないかもしれませんが、私なりに今日感じたことを簡単に申しあげます。大阪の文化力というのは昔から相当あって、大阪人自身がその文化を楽しまなければいけないということ、文化というのはカルチャーと言いますけれども、クリエイトとコミュニケーションというこの二つのCが大切です。新しいものを作る面白さ、何でも新しいものに飛びつく、昔は中国の唐物だったかもしれないが、いまは世界中の新しいものへの好奇心。それとコミュニケーションは、文化を通じているいるな人とつながれるのだということを強く感じました。

現代の大阪については、関西企業もなかなか頑張っています。大阪商工会議所は全国初の「公益財団法人大阪コミュニケーション財団」というのをつくつております。これは民間の力で、地域の文化・社会活動、コミュニケーション活動を活発にしていこうというものです。企業の財団や美術館・博物館も関西は多いです。阪急、パナソニック、大同生命などいろいろな企業が財団を作って文化に貢献しています。

大阪から始まって全国に普及しているものも、高校野球をはじめとしてたくさんあります。「AC」という公共広告のテレビCMを見ら

れることが多いと思います。あれも、もともとはアメリカで始まったのですが、日本でのスタートは一九七〇年の万博の翌年に、関西公共広告機構という団体が大阪にできまして、これが全国に広がっていきまして、いまや本部は東京に移りましたけれども、もともと大阪の財界が始めた活動です。

以上のように、まだまだ関西というのは企業、あるいは市民、行政も含めて新しいものを作り出していくパワーというのは十分あるのではないか。そのパワーを引き出す力の源になるのが文化である。文化力については、大阪は非常に大きな蓄積を、皆さんがおっしゃいましたように蓄えている。大阪は自分の足元を見つめて、自信を持ってやれば、全国あるいは世界に誇りうる宝物というのはいっぱいあるというのを今日実感しました。本当に、皆さん長時間ありがとうございました。

(拍手)

明尾 長時間ありがとうございました。博物館では、展観しておりますので、お帰りの際に合わせてご覧いただけたらと思います。質疑応答の時間がとれませんでしたので、会場のほうで、あるいは少しまたお話していただけたらと思います。本当に長時間、皆さま、ありがとうございました。ご講演の皆さま、ありがとうございました。

(拍手)

(本稿は二〇一二年一月二〇日に大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天に於いて開催されたシンポジウムの記録である。)

資料出典

図14 大英博物館蔵

図15～17 関西大学図書館蔵